和光大学の先生たちに

いま、きみたちに読んでほしい本を

三冊ずつえらんでもらった。

これはその第四集。

前回の第三集を発行した二〇一一年から

あらたに多くの先生があつまって、本の紹介をしてくれた。

よく知っている先生もよく知らない先生も

自然とその人となりが浮かんでくるからおもしろい。

直接、本を手にとって夢中になるもよし

一人ひとり先生の顔を思い浮かべながら読むもよし

本と自分、先生とわたし、つながるたのしさを実感してみてください。

「本を読もう！」なんて、よけいなお世話で・す・よ・ね？

言われなくて読んでるって？ そりゃそうですね。本好きのあなただから、この冊子を手にとってくれたのだし、この冊子だって「本」の一種って言えなくはありませんから……。

この冊子を手にとっているあなたには「釈迦に説法」。しかもこの文章を読んでいるなんて、表彰モノかも知れません。館長室に来たら、何か差し上げなくちゃいけないような気がするけれど、気がするだけで、たぶん何もあげない。

この前文を読むよりも、はやくこの後にある先生方の推薦図書を見てみることをお勧めします。仲の良いあの先生がどんな本を推薦しているか。授業では怖そうな顔をしているあの先生の読書傾向がどんななのか……。先生の趣味まで覗き見ができるかも知れません。専門領域の本だけを推薦している先生もいらっしゃるし、肩

の凝りをほぐすためにセンセが読む本をあげておられる場合もあります。先生がどんな本を土台に研究や授業を組み立てているかがわかるかも、なのです（わからなくても、わたしに文句を言わないでください）。そして、先生の性格や発想法まで見えるかもしれないのです。言うならば、「企業秘密」、あるいは「個人情報」でしょう。考えようによっては、かなりヤバイ（どっちの意味だろう？）冊子なんですから。

持ってって、持ってって下さ〜い！ この冊子。カバンの中に突っ込んでおくとかかの役に立つかもしれないです。あなた。オープンキャンパスに来た高校生ですか？ 決してご遠慮は要りません（宮澤賢治風です）。二冊持って行って、高校の先生にも配ってくれたら、嬉しいですよ。在学生なら、もちろん「持って行きなさい！」です。それ以外の方々も、どうぞ読書のご参考にお持ち帰りください。

「なんだか、あまり格調の高くない前文だなあ」って思ってますか？

しからば、此処より急に格調高そうにしてみよう。

本冊子は、本學の四十二人の教授、准教授、専任講師諸氏、即ち學問の諸先達が

「貴君貴嬢、以下に掲ぐる篇帙を繙かずして學生を僭称すること勿れ!」、
「読書百遍意自ずから通ず! 難解な書籍に何回も挑戦せよ」などと心底に〇〇(虫食いの為、二文字不明)を秘めつつ、推薦したる書冊の纂輯・案内書なり。

掲げらるる諸書、昔日大流行稗史もあれば、最近大評判小説もあり。光面集、藝術書の他に、士希賢II希哲学書、青史の書冊もあれば、炊爨指南書もあり。勿論、経世済民の學術書、音曲関連書、電影関連書等も挙げられて居る。「嗚呼、斯様な領域の書物も世に有る事哉」と諸君諸嬢、驚嘆吃驚すること必定(ここで張り扇の音が入る)。(ああ、疲れた……)

とにかく、この前文よりも……

とにかく、この前文よりも本文を(前文をここまで読んでくれた人には感謝感謝)。
要するに、この冊子は和光大学の教員たちの、知と汗と涙(は、無いな)の結晶
とも言える貴重な冊子です。興味があつたら第一集から第三集の中身と比較するの
も面白いかもしれません。

さあ、レッツ・リード!!

きみたちに

ぜひ読んでほしい本を

三冊あげると……

浅見克彦

(総合文化学科)

- ① 『メディア論——人間の拡張の諸相』 M・マクルーハン (みすず書房)
- ② 『記号学の冒険』 ロラン・バルト (みすず書房)
- ③ 『ブレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』

アルベルト・メルツチ (ハーベスト社)

「わかりにくい本こそ読む価値がある」。

文献を紹介した学生から、「もう少しわかりやすいものを」と言われることがある。読みにくくて「扱いにくい」というのだ。けれども研究とは、わかっていないことを理解する試みなのだから、これでは困ってしまう。

というわけで、かなり難物だけれど読むべき書籍というのを紹介しよう。

①—メディア論の「創始者」の名著。独特の箴言風の語り口や、誇大な主張は馴

染みにくいだろうが、そこを読み下さないとメディア論の世界には入っていけない。

②—現代思想の翻訳にはとっつきにくいものが多いが、本書はこらえればわかってくる好著。もちろん、記号論の入門書を参照する必要はあるだろうけれど、こうした手間は学問の常道でしょう。

③—これは、個別の事実をあまり紹介せずに、現代社会の時代的特徴を抽象的に総括している。だから、抽象的な概念にぶつかったときに、具体的な現象を想像する努力が欠かせない。けれどもそれは、抽象概念を社会の事実にあてはめながら読んでいく醍醐味を味わえるということでもある。読むとは思考することだ、という事実を改めて噛みしめてほしい。

わかりにくさを端から嫌ってはいけない。整理を正確にし、理解を深めるためには、厄介な術語の整理を極め、複雑な議論を展開する必要もあるのだ。もちろんこれは、教師も肝に銘ずるべきことなのだけれども。

岩崎功

(経営学科)

①『学び続ける力』池上彰 (講談社現代新書)

②『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』——身近な疑問からはじめる会計学』

山田真哉 (光文社新書)

③『課長の会計力——自分とチームが結果を出すための数字の使い方』

望月実 (日本実業出版社)

①—「学べば学ぶほど視野が広がり、自分の知らないことに出会う。それが自分の好奇心を刺激します。好奇心が大きくなれば、ワクワクする気持ちに満たされま
す。知的スリルを味わうのです」「学ぶ楽しさを知ること。それが現代の教養では
ないでしょうか」と「はしがき」に書かれている。本書は、大学に入ったけれど、
何をやっていいのか分からない人には是非とも読んでほしい一冊である。「すぐ
は役立たないことを学んでおけばずっと役に立つ」という言葉を通して、「大学で

何を学ぶか」について考えさせられる。

②—売上げ百六十万部を突破した会計学の入門書で、すでに会計を学んできた人
が読んでも、逆に、会計(数字)に興味がない人が手に取っても「なるほど」と納
得できる一冊である。表紙の裏面にもあるように、「会計が嫌い」、「会計が苦手」、「会
計を学んでも意味がない」と思っている人も、読み進めるうちに日々の生活に転がっ
ている「身近な疑問」を通して、会計のイロハを学ぶことができる。

③—卒業後、就職した会社の将来の行方はあなたにかかっている。現在、会計の
知識がある人もない人も、入社後に必要になってくる会計についての入門書である。
入社後、主任、係長、課長などについたときのことを考え、一番必要なことは、会
社全体の現状がどのようになっていのかを見渡す能力であるが、それはより良い会
社の業績や十分な債務弁済能力、会社の安定した将来性など、会計の知識をフル活
用できるかにかかっている。

岩本陽児

(心理教育学科)

①『食道楽』上・下 村井弦斎 (岩波文庫)

②『特命全権大使米欧回覧実記』全五巻 久米邦武編 (岩波文庫)

③『「親の顔が見てみたい!」調査——家族を変えた昭和の生活史』岩村暢子 (中公文庫)

①—いや、面白いのなんの。明治のインテリが食生活の改善、すなわち西洋にない、調理に手間暇をかけた消化の良い滋養食をプロモートするところになった。一度食してみたもの、そうでないものも含め、レシビが三百余り収録されている。粗悪な肉で量目をごまかす悪徳商人もいっぱいいたらしく、本書は消費者教育も狙っている。といって、こうした事柄は、主人公大原満くんのラブコメディーにちりばめてあって、飽きさせない。とにかく本書は大売れして、その売れ行きとときに当時の文人尾崎紅葉、幸田露伴らをまとめて足してもとて及ばない程だったという。

かくて、本書で大もうけをした村井さんは平塚に広大な地所を求め、自給自足の生活に入ったが、訪問客が跡を絶たなかった。後に日立製作所を創業した某氏は、彼のお弟子筋であったとか。

ちなみに、私が川崎市の公民館で生涯初のピブリオバトルに挑戦したとき、この本は見事、チャンプ本に選ばれたのであります。うふうふ。

②—明治初年、すなわち一八七〇年代に、維新の立役者、岩倉具視、木戸孝允らは、明治天皇のレターを持って、世界の主要国に新政権発足の挨拶回りを行った。その時、随員だった著者、後に早稲田大学教授となる久米が、好奇心いっぱい書きとどめたのが本書。これまた、その時代の大ベストセラーだった。シリーズ第一巻が米国、第二巻が英国の記録となっている。英国の巻を見ると、産業革命の黄金時代がどのようなものであったかがびんびん伝わってきて興味が尽きない。そうか、明治政府の第一世代は、日本をこういう国にしたかったのだな。

二〇一三年度の共通教養科目「英国の環境保護」で、学生とイギリスでのフィールドワークを行った。私たちがベースにしたディング市にも使節団は足を延ばし

ていて、「ウレッチング」と表記している。彼らを饗応したタウンホールの一室を私たちは見学し、日本使節団来訪の数年後に描かれた町の主立ち衆の油絵がかかっているのを見たのだった。

ところで、彼らはロンドン動物園を見学したとき、「勘九郎」という動物を見たそう。さて、何でしょう？

③―著者は社会調査の専門家。一九六〇年代から七〇年代に生まれた母親世代が、子どもたちとどういう食卓を囲んでいるのかを調べて、その手抜きぶりに驚愕した。その母親世代は、母の手作り料理で育ったはずなのに。そこで、さらにその母親すなわちおばあちゃん世代を対象として、次なる調査が始まった。そこで明らかになったのは、意外な事実。すてにおばあちゃん世代にして、母親の手作り料理で育ったのは、意外な事実。あぁびっくりした。家事労働時間の短縮・合理化こそ、時代の精神だったのだ。『食道楽』の村井弦斎が知ったら、さぞびっくりしたろうな。思い込みを排除して、事実を明らかにしながら、その事実在即して考えることの大切さを本書は教えてくれている。公民館もちょっと出てくるぞ。読むべし。

上野哲郎

(経営学科)

①『ヤバイ経営学―世界のビジネスで行われている不都合な真実』

フリーク・ヴァーミューレン (東洋経済新報社)

②『機械との競争』エリック・ブラインジョルフソン、アンドリュース・マカフィー

(日経BP社)

③『オーケストラの音楽史―大作曲家が追求めた理想の音楽』

パウル・ベッカー (白水社)

①―まずは、題名に惑わされないでください。この本には、いわゆる世間一般でいわれている経営の常識が覆されるようなトピック (M&A、リストラ、成果主義、イノベーション、経営戦略、組織改革など) が満載です。これらは、非常に平易な語り口で書かれています。著者の単なる「感覚」や「経験」ではなく非常に多くの研究の成果を基に記されています。新たな経営に対する考え方が生まれるかもし

れません。ただし、これを読む前に、経営の基本といわれるものを学んでおくことが必要です。

②一〇一三年現在、景気回復の兆しがみえるにもかかわらず、雇用が回復しない状況が生まれています。本書では、その原因はとてつもないデジタル技術革新のスピードに、雇用の転換・調整が追いつかない点にあるとしています。進化しつつあるコンピュータが、今まで人間にしか行えないと考えられた仕事を、次々と人間から奪いつつあると指摘しています。人間と機械の共存共栄が壊れつつあり、その結果、人間には創造的な知的労働と肉体労働のみが残され、所得の極端な二分化が起こると予想しています。かなり刺激的な内容ですが、技術革新抜きでは語れない現代社会について、考えるきっかけを与えてくれると思います。

③―本書では、作曲家が自らの音楽に求めたものを実現する場としてオーケストラをとらえ、その変遷を描いています。作曲家が、どのような和声、音色、響きを求めたのか、どのような形式の音楽を書きたかったのか、その実現のためにオーケストラにどのような編成を要求したのか、オーケストラの中で個々の楽器にどのような役割を担わせてきたのかについて述べられています。さらに、作曲家が生きた社会や時代背景が、これらの変遷にどのように影響を及ぼしたのかについても描かれています。

上野俊哉

(総合文化学科)

- ①『ディアローグ―ドゥルーズの思想』ジル・ドゥルーズ、クレール・バルネ (河出文庫)
- ②『山口昌男コレクション』今福龍太編 (ちくま学芸文庫)
- ③『シャンタラム』全三巻 グレゴリー・ティヴィッド・ロバーツ (新潮文庫)

①―精神科医のフェリックス・ガタリとタッグを組んでいた哲学者ジル・ドゥルーズが、愛人(?)との噂もあったクレール・バルネと二人で書いた本。どっちがどのパートを書いているか考えて読むのも楽しい。フランスの哲学書なのにポップ・ディ

ランの歌詞がまるごと引用されていたり、ヴァージニア・ウルフやフィッツジェラルドなど英米文学がたくさん論じられていたりする。七〇年代に出た本なのに（ゆえに？）、すでに「摂食障害」を哲学的な思考の対象としている。本書における「精神分析批判」の視点は、今日のキャンパスや社会におけるカウンセリングや心理学主義への強い疑問や異議の源になっている。今から三十年ほどまえ、G棟のいろんな先生の研究室で先輩たちと読書会で使った。わからないことが多く、結局フランス語を初級からはじめる羽目になったけれど……。専門領域の規律しきとまるで無関係な物書きになってしまったのも、この本との出会いのゆえか？

②—先頃、天空に旅立った陶酔と弱さをあわせもった文化人類学者の記憶の書。山口先生に教わったのは教室のなかではなかった。ときに酒場のカウンタ―ごしの会話、ときに奄美のガジュマルの樹の下で島の精霊の息吹を感じとりながらの散歩、学会ではなく企業が主催した研究会……。思えばどれも専門領域の規しき律からはかけ離れた場所だった。悪文の見本でありながらなお人を読書の熱狂に誘わずにはおかない論考「失われた世界の復権」がひかる。演劇、映画、神話、ダンス、スポーツ、贈る渾身の山口コンピレーション。

③—良き市民の常識からではなく、むしろ犯罪者の書く言葉からときとして多くのことを学ぶ。オーストラリアの大学で哲学を教えていた著者は、銀行強盗を犯し、逮捕され収監されるが、脱獄してインドにわたり、スラムで医師として働き、犯罪組織に加入し、さらにアフガニスタンの奥地でイスラムの戦士たちと行動をとともにすることに。ほぼ実体験にもとづくこととされ、ジョニー・デップ主演で映画化されるという噂もあるピカレスクロマン（悪漢小説）にして、一種の教養小説。本書にインスパイアされ、「犯罪者の書いたテキスト」という主題の講義を構想中。インドのスラムや監獄の描写はすさまじい。しかし、主人公や脇役たちとの愛や宇宙生命……をめぐる対話はときに美しく、またするどい洞察に満ちている。

内田正夫

(総合文化研究所)

- ① 『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ——18世紀フランスのジェンダーと科学』 川島慶子 (東京大学出版会)
- ② 『医学者たちの組織犯罪——関東軍第七三一部隊』 常石敬一 (朝日文庫)
- ③ 『人類が知っていることすべての短い歴史』 ビル・ブライソン (日本放送出版協会)

①—十八世紀バリは、王妃マリ・アントワネットを筆頭格として、貴族の女性たちの催すサロン文化が華やかでした。そのサロンの新奇で心躍る話題のひとつは自然哲学(つまり科学)でしたが、当時、科学研究は男性の独占物。女性たちはその観客にすぎなかったのです。そんな中で、シャトレ侯爵夫人エミリーは男たちの科学アカデミーに公然と挑戦し、最新のニュートン物理学を初めて本格的にフランスに紹介しました。また大化学者、アントワヌ・ラヴワジエの妻マリーは、実験助手、記録係、挿絵画家、文献翻訳者、などの役を一手に引き受けて科学研究の現場で内

助の功を尽しました。本書は、ジェンダー意識の偏りが強烈だったこの時代に、科学という男の世界で活躍し、さまざまな矛盾に苦悩した、稀有な二人の女性の生き方を紹介します。

二〇一三年に本書の仏訳版が出版されました『Émilie du Châtelet et Marie-Anne Lavoisier——Science et genre au XVIIIe siècle』(Honoré Champion)。

②—アジア太平洋戦争中、中国人捕虜たちに残酷な人体実験をおこなった悪名高い七三一部隊の名を聞いたことがあるでしょう。この戦争犯罪の責任は、石井四郎という特殊な軍医個人のみせいだけにすることはできません。石井機関は、満州の関東軍防疫給水部と東京の陸軍軍医学校防疫研究室を中心にして全陸軍の中に作り上げられ、研究・実験・製造・実戦を行なったネットワークだからです。さらにそこには非軍人である大学医学部の研究者たちも組み込まれました。帝大医学部の教授たちは「囁託」として研究のリーダーを引き受け、弟子たちを実地研究を担う「技師」として現地へ送り込みました。そして敗戦後、元技師たちは、日本各地の大学医学部や医療行政の指導的地位に就きました。本来病人を救うべき医学者たちが、どの

ようにして正反対の目的を持った組織に巻き込まれていき、さらに戦後もそれを反省することなく医学研究を続けることができたのか。医学研究者という専門家の倫理が歪められていった過程を、軍と医学界の組織から論じています。専門家の社会的責任は、フクシマ以後の現在、原子力ムラの関係者についても問われるべき共通性を有していると思います。

③—七百ページ近くの本ですが、どこでもよいから、一項目読んでみてください。科学にはシロウトのエッセイ作家が、本や論文を読んで学び、多数の科学者に質問を繰り返して書き上げたのが本書です。君がいま、この宇宙の中で、この文章を読んでいるという不思議さ。十の何十乗個の原子がたまたまある仕方です。その現象が生じているのです。また、地球の中心は太陽の表面と同じくらいの高温でどろどろに融けているというが、そんなことがどうしてわかるのだろうか。無数の素朴な疑問と、それに答える現代科学の知識。そして、そんなことを人類はどうやって知るようになったのか。現代科学でわかっていることの *nearly everything* について、科学のシロウト（だが、エッセイストとして定評ある）著者が書いた、楽し

く読める科学の本です。

原書は『A Short History of Nearly Everything』（Black Swan）。

遠藤朋之

（総合文化学科）

①『にほんごの話』谷川俊太郎、和合亮一（青土社）

②『詩とことば』荒川洋治（岩波現代文庫）

③『マイ仏教』みうらじゅん（新潮新書）

①—詩集となると二の足を踏むかもしれないが、「詩についての本」であれば、気軽に読める。日本のもっとも有名な詩人と、震災のために、そのつぎに有名になってしまった詩人の対談集。話は詩の話の方が少ないくらい。ゲーム、教科書、擬音（オノマトペ）、ことばと経済の関わり、ことばと身体に関わり、般若心経……。それも、始終、谷川が和合をからかいながら、だが要点だけはしっかりと捉えながら

進んでいく。谷川のトリックスターぶり、そして和合の直球勝負ぶりがすばらしい対比になって、読者を飽きさせない、そして詩のすがたがおぼろげながら浮かび上がってくる本。

②「詩人」ではなく「現代詩作家」を名乗る荒川による、二〇〇四年出版の単行本の文庫化。なぜ詩では行分けするのか、詩のリズムのなぞ、また、くりかえしが生む効果など、具体的に詩に当たってわかりやすく解説してくれる。また、多くの詩人の作品を、荒川自身の皮膚感覚から解説してくれる。「おお、そう読めばわかりやすいなあ！」と納得することしきりである。以前、荒川が『文学が好き』（旬報社）というタイトルの本を出したときは、非常に驚くと同時に、首を激しく縦に振ったが、荒川作品に通底するのは、この「文学が好き」という、どうしようもなく溢れだしてくる感情だ。

③「マイブーム」、「ゆるキャラ」、「いやげ物（もらってイヤなみやげもの）」、「とんまつり（日本中のとんまな祭り）」、「仏像ブーム」の火付け役などなど、独自の視線でもって日本を活性化させてしまふ、みうらじゅん。そのみうらが自分の仏教愛を炸裂させるのが本書。みうら自身の鬱屈した思春期が語られ、それだけでも笑えるのであるが、それが仏教とつながってくる。ここで語られるのは、みうらがそのころとからだとで経験した仏教だ。だから仏教がポップ・ディラン、ビートルズやジョン・レノン、ウルトラマン、アントニオ猪木などと重ねて語られる（そういえば、アメリカの詩人でエコロジスト、日本で禅の修行も行なったゲーリー・スナイダーも「仏教は宗教ではなく実践だ」と語っていたな）。そして本書の魅力は、みうらの傑出した言語感覚。「自分探し」ではなく、「自分なくし」や「僕滅運動」、心配事があるときには「不安タスティック!」、「後ろめたさ」を象徴する物が「後ろメタファー」。とにかく笑える、そして、思春期のやりきれない不安に苛まれる高校生や大学生には、なんだか役に立っちゃいそうな本である。

大坪史治

(経営学科)

① 『世界経済を破綻させる23の嘘』 ハジユン・チャン (徳間書店)

② 『暴走する資本主義』 ロバート・B・ライシュ (東洋経済新報社)

③ 『路傍の石』 山本有三 (新潮文庫)

①—本書には、経済の常識を疑えとあります。現行の自由市場経済について「23の嘘」を挙げています。とくに「第2の嘘」株主の利益を第一に考えて企業経営せよ」では、株主の利益を最優先する企業は発展しないと主張しています。浮動株主の利益を最優先させて企業を経営するのは、不公平であるばかりでなく、非効率でもあると述べ、「世界経済をどう再建すればよいのか」と問題提起して、経済システムを設計し直す必要を論じています。

②—本書は、米国型の市場主義の矛盾や批判をわかりやすく教えてくれます。そのなかで印象的なのが、人間の二面性です。人は、資本主義の立場において有利な取引を望み自己の利益を追求します。これに対し、民主主義の立場においては、市民として社会的悪影響を懸念します。この二面性は、ときに矛盾する立場にあると示しています。これは、企業の社会的責任論に展開されていきます。

③—主人公は、成績優秀で学業を望んでいる。しかし家庭の経済事情で学業を続けられず、中学校に進学できず、働きに出されます。そこで数多くの試練、理不尽な出来事や不平等な扱いを経験していく。さらに精神的支えであった最愛の母を亡くし孤独となる。現代は、望めば学業に専念できる環境や制度に恵まれています。自由に学問を学べる幸せ、そんなことを再考する一冊です。

大西公恵

(心理教育学科)

① 『日本人のしつけは衰退したか——「教育する家族」のゆくえ』 広田照幸 (講談社現代新書)

② 『木のいのち木のころ——「天・地・人」』 西岡常一、小川三天ほか (新潮文庫)

③ 『武士の家計簿——「加賀藩御算用者」の幕末維新』 磯田道史 (新潮新書)

① 「家庭の教育力は低下している」というイメージが常識のように語られています。では、昔の家庭では本当に厳しくしつけが行われていたのでしょうか？ 本書では、家族と学校の関係、家族と地域の関係に着目しながら、家庭におけるしつけが歴史的にどのように変遷してきたのかを検証しています。

「家庭こそがしつけや教育の責任を負うべき」という考え方や、親たちが抱えている「しつけ不安」といった現代の教育・家族の問題について考える手がかりを与えてくれる一冊です。

② 「一人前」になるとはどのようなことだと思いますか？ 本書では、法隆寺の修復にたずさわった「最後の宮大工」と呼ばれる棟梁西岡常一と弟子の小川三夫、そして宮大工の若者たちによる語り「聞き書き」という形で記録されています。そこでは宮大工として生きるとはどのようなことか、木とどう向き合うのか、といった宮大工の仕事や心意気とともに、伝統的な職人の世界で受け継がれてきた「徒弟制度」という人づくりの形が紹介されています。現代の学校で行われる教育とは異なる、「職人の技や勘」を次世代に継承する独特の人づくりの方法を通して、人間形成の道筋について考えを巡らせてみませんか。

③ 幕末に加賀藩の「ソロバン役」を務めたある武家の生活の歴史が、家計簿や日記、書簡をもとに再現されています。例えば、家財道具を売り払わねばならないほど借金の返済に苦しんでいた猪山家ですが、子どもの出産や成長に関わる通過儀礼や教育にはしっかりとお金をかけました。長男の出産の際にどのような衛生用品や薬を準備して出産に臨んだのか、誰を呼んできてどのようにしてお産が行われたのか、という具体的な様子を家計簿の出費の記録から知ることができるのです。み

なさんが知っている武士の姿とはまたひと味違った武士の家族のリアルな暮らしの様子を垣間見ることが出来ます。歴史を知る楽しさを実感できる一冊です。

奥須磨子

(経済学科)

① 『村の遊び日——自治の源流を探る』 増補 古川貞雄 (農山漁村文化協会)

② 『働く過剰——大人のための若者読本』 玄田有史 (N T T 出版)

③ 『ミシンと日本の近代——消費者の創出』 アンドルー・ゴードン (みすず書房)

①——箱根登山鉄道に「風祭」駅がある。そもそも風祭とは秋の収穫前に豊作を願って大風が吹かないように神に祈る古代以来の祭礼であることはよく知られている。が、この本で、風祭や雨乞い・雨祝い、虫送りなどが全国で盛んになるのは特に江戸時代後期であったことを知った。それは、村人たちが村の遊び日を増やす理由として、ありとあらゆる神仏祭礼・祝祭行為を動員したからであったという。遊

び日増大要求の背景や意味もさりながら、若者組が村の大人たちと連携しつつ要求を実現していく様が興味深い。

②——労働経済学の研究者が現代日本(一九九〇年代以降)における若者と仕事との関係について論じた書。「ゼミのみんなと読むならこんな本！」探しをゼミの課題にしたとき、一人の学生が図書・情報館からこれを持ってきた。副題は「大人のための若者読本」。「まず大人が読めというメッセージ？」と読んでみた。仕事論沸騰の状況のもと、真面目に考えるがために途中で息(生き)苦しくなってしまうようなとき、大人だけでなくこれから働こうとする若者にも一読の価値あり。論の基本的根拠が適切に配され、しかも読みやすい。

③——二十世紀初めから半ばにおけるグローバル化の中で、日本はどのような社会の変容を経験してきたのか。当時、地球全体にひろがりゆく近代性と近代化の運び手であり手本だったミシン。消費財・生産財両性具有のミシン。これを究明のためのレンズとして設定し、膨大な関連資料を収集・駆使した力作。日本における近代

性の経験の多種多様な相が丁寧に解明されているので、中流階級（意識）論、近代女性論、工業生産の科学的経営・品質管理や広告・販売術の形成過程など、それぞれに関心から読んででも得るものがある。

加藤巖

（経済学科）

- ① 『世界を変えた6つの飲み物―ビール、ワイン、蒸留酒、コーヒー、紅茶、コーラが語るもうひとつの歴史』 トム・スタンデージ（インターシフト）
- ② 『グローバル社会を歩く―かわりの人間文化学』 赤嶺淳（神泉社）
- ③ 『1Q84』 Haruki Murakami（Vintage International）

①―僕は旅が好きだ。今夏、ベトナムを訪れた。気ままな旅だ。歩き疲れたら、道端の露店でコンデンスミルクがたっぷりに入ったコーヒーを飲む。甘さがとろりと口中に広がる。喉もとでふと疑問がわく。アフリカ東部で生まれ、アラビアで洗練されたコーヒーがどうやってベトナムにやって来たんだろう？ 本書はコーヒーをはじめワインやコーラなど世界に広がった六つの飲み物の物語だ。飲み物と社会の関わりに興味と喉の渇きがわいてくる好著。

②―旅の途中に「他人の旅」を読むことが楽しい。先日も旅先で読んだ本が面白かった。これは六人の研究者が日本を含む世界で行ったフィールドワークの記録だ。中でも、東アフリカで女性研究者が進めている、野生ゾウと村人たちの共存共栄の取り組みが興味深い。野生動物の保護は重要だ。でも外野からはそこで暮らす人々との共存の視点は見えてこない。フィールドワーク参加者に読んでもらいたい一冊。きつと旅の構想に繋がっていく。

③―帰国便を待つ間にマレーシアのクアラルンプール国際空港の本屋で一冊購入した。機上で読むためだ。旅の終わりにには昔読んだものの再読がお勧めだ。今回は村上春樹『1Q84』を選んでみた。もちろん、英語版。村上ワールドが英語でも息づいている。あの感覚は日本語でしか表現できないと勝手に思い込んでいた。なる

ほど、こんな風に英語では表現するのか！ 村上ワールドが二重に楽しめる。装丁家のチップ・キッドが手掛けた表紙もカッコいい。

木村重樹

(総合文化学科)

①『ナポリへの道』片岡義男 (東京書籍)

②『ドイツのロック音楽』またはカン、ファウスト、クラフトワーク』第二版

明石政紀 (水声社)

③『ユービック』フィリップ・K・ディック (ハヤカワ文庫)

①—NHK朝の連続ドラマ「あまちゃん」内では「あはずれの食いもの」呼ばわりされていたスパゲティ・ナポリタン。外食界でも最近再ブームだそうですが、実はイタリアのナポリに行っても食べられません(じゃえじゃえ)。というわけで、同メニューをこよなく愛する著者が、戦後日本で独自に「発明」されたナポリタン

がその後大衆食として定着をみるまでの経緯を体験的&分析的に綴った好著。文化の越境や異文化受容を考えるうえでケーススタディとしても示唆的。

②—ナポリタンの次はクラウト・ロック(『七〇年代初頭のドイツのバンド音楽』をこれまた分析的かつ偏愛的に綴った本書。五〇年代半ばに米国で誕生したロック音楽は英国で独自の発展をみ、その後(日本を含む)先進諸国へと伝播してゆくのだが、そのドイツにおける実験風味の謎に肉迫する。多くの音楽評論が原典の注釈として存在しがちなのに対し、著者は「元曲を聴かずに本書を読み、読み手が勝手に音楽を想像する」ことすら推奨している。それまたエクスペリメンタル！

③—最後に自分が大学生時代に読んだ一冊を。『ブレードランナー』や『トータル・リコール』といったSF映画の原作者として知られる著者の代表作のひとつで、予知能力者らによる宇宙活劇もあるが「SF」としてはあまり盛りあがらず、主人公らの属する世界が謎の「時間退行」をひき起こしてエントロピー増大、生きながら死んでゆくIIゾンビ化への道を邁進する存在論的不条理スリラー。「胡蝶の夢」ネ

タをこよなく愛するアナタは「現実もそう捨てたもんじゃない」と、佇まいを改めることだろう。

倉方雅行

(芸術学科)

- ① 『心を動かすデザインの秘密——認知心理学から見る新しいデザイン学』 荷方邦夫 (実務教育出版)
- ② 『日本のデザイン——美意識がつくる未来』 原研哉 (岩波新書)
- ③ 『売れる商品は感性工学がある。——人の意思決定の9割は「気分」』

椎塚久雄 (ベストセラーズ)

①—本書は、デザインは見た目や単に美しいという事ではなく、「人間が生きていく中で、自分を取り巻く世界を変化させる工夫のこと」であると、専門分野の認知心理学を通して、認知科学とデザインとの関係性を解き明かしている。用語は専門書的なものもあるが、日常的な読者の行動を例にあげ、「好きになる」「気に入る」の心理的メカニズムとデザインの仕掛けなどを親しみやすく解説している。デザイン系に限らず心理系学生にも読んでもらいたい一冊。

②—広い意味での「モノ作り」の中で、著者が自らの仕事を言う時の「コト作り」を、日本文化で培われた「美意識」のアイデンティティを解説する上で、戦後史や自身の仕事での経済や文化活動を通して、事例や構想を語った一冊。東日本大震災によるパラダイムシフトで、日本のこれからを大きく変えていく原動力になるであろう、今の学生に読んでもらいたい。デザイン系にとどまらず経済系の学生にも勧めたい。

③—元日本感性工学会会長の著者が、モノやサービスを購入するときの条件の一部「楽しさ」「心地よさ」「面白さ」をさらに説明のしにくい心理状態「ワクワク感」や「ドキドキ感」を加えたテーマで執筆している。近年「感性工学」の考え方を開発に取り入れた、身の回りの商材の成功事例を開発裏話的に挙げながら、それこそ「楽しく」読みやすく解説している。全学生にお勧めだが、特にデザイン、心理、経営系の学生は興味深く読めるであろう。

高坂康雅

(心理教育学科)

① 『教室内(スクール)カースト』 鈴木翔 (光文社新書)

② 『大学生と語る性——インタビュアーから浮かび上がる現代セクシュアリティ』

田村公江、細谷実編著 (見洋書房)

③ 『何者』 朝井リヨウ (新潮社)

①—中学校や高校では、クラス内にもいくつかのインフォーマルなグループが生じる。これらのグループは同じ学年・同じクラスであるにもかかわらず、部活や趣味、外見などによって、生徒間で暗黙に共有される地位の差が存在する。そして、そのグループ間の地位の差は、教師も感じ取り、学級運営に利用することもある。本書はこのようなグループ間の地位の差について、インタビュアーやアンケート調査で検討した力作である。

②—セックスについて、友人や恋人と真剣に語り合うことは、どのくらいあるだろうか。大学生の五十パーセントはセックスを経験している現在、性・セックスに対する考え方は多様化し、自分がどのように考え、友人や恋人の考えと同じなのか、異なっているのかわからない時代になっている。しかし、そのようなことを語り合う機会は、あまりない。本書では、大学生が真剣に性・セックスについて語っている。そこから、読者自身の性・セックスに対する考え方もみえてくるかもしれない。

③—「あなたは何者か？」と問われるとき、青年はきつと答えに窮するだろう。青年は何者かになろうとするが、実際に何者かになることは難しい。一方、ネットに目を向ければ、誰もがアイドルになれ、誰もが情報発信者になれ、誰もが制作者になれる。現実では何者にもなれないが、ネットでは何者にもなれる。就活の情報交換をきっかけに集まった五人の青年が何者かになる過程を、現実とネットの行き来の中で見出した本書は、就活前に一読しておくとも良いかもしれない。

小関和弘

(総合文化学科)

① 『詞集 たいまつI』 むのたけじ (評論社)

② 『鉄で海がよみがえる』 畠山重篤 (文春文庫)

③ 『薄墨色の文法——物質言語の修辞学』 今福龍太 (岩波書店)

①—新書版で手に取りやすく、アフォリズム(短い警句)風の文章の集成だからどこからでも読めるので読みやすい。しかし中には幾つもの鋭いトゲが隠されている。ことばのトゲだ。一九四五年の敗戦と同時に、勤務先だった朝日新聞社の戦争協力に愛想つかして退社し、故郷・秋田県横手で手作りの新聞「たいまつ」を刊行し続けた反骨のジャーナリストの敵しいことばの数々だ。「ねむるなら目をつぶりなさい。考えるなら目をあけなさい。目をつぶって考える中味は大概くだらない」。あなたは目をつぶりますか? 続編がIIからVIまで刊行されている。

②—気仙沼でカキ養殖を続けている『森は海の恋人』(文藝春秋)の著者・畠山さんが、より一層科学的に海と森(広葉樹林)との関係を述べた本。生物にとつて鉄(Fe)がいかに大切かを語り、自然界の深い繋がりを教えてくれる。フミン酸やフルボ酸など、化学の言葉もたくさん出てくるが、文学にしか興味がないという人でも、みどり豊かな森がどんな風に海の景色を作ってくれるのかということが分かって自然への視線が変わってくるはず。畠山さんは宮沢賢治学会が選ぶ「イーハトーブ賞」を二〇〇四年に受賞した方でもある。同じ筆者による絵本『カキじいさんとしげぼう』(講談社)もお薦め。

③—詩を考える際に「沈黙」や「身体」について意識しないわけにはいかない。言葉は、身体を形作る様々な物質がうごめく世界の、そのさらに奥深いところからやってきて、私を、あなたを捉えるのだから。その聞こえない/見えない、深い領域に向きあう身構えを忘れて詩を読むことはできない。著者はあらゆる書字言語に先行する「叡智」への志向を示してくれる。これは、言葉によって、言葉の届かない領域へ私たち読者をいざなう緊張感あふれる営みだ。

小林正典 (身体環境共生学科)

① 『漂流民』羽原又吉 (岩波新書)

② 『馬の世界史』本村凌二 (講談社現代新書)

③ 『費孝通——民族自省の社会学』佐々木衛 (東信堂)

①—漂流民とは、船を住居とし、海上移動を続けながら漁業を行ってきた集団のことをいう。東南アジアの海域に分布するオラン・ラウト(水の民)と呼ばれる人々などが漂流民として知られているが、日本でも家船えがねと呼ばれる漂流民が、長崎県西彼杵郡や瀬戸内海の各地に分布していた。本書は、このような船上で一生を過ごす漂流民に焦点を当てて彼らの足跡を収録したものであり、漁業史・漁民史の一側面として興味深いだけでなく、アジア民俗史を考える上で様々な示唆を与えてくれる。

②—本書は、「人類の文明は馬によって数千年も早く進展できた」と考える著者が、馬から見た世界史を簡潔かつ平易に解説したものである。強力な軍隊をもってメソポタミアを侵攻したヒッタイト、ユーラシアの騎馬遊牧民から誕生したアッシリア、四頭立ての馬に引かれた戦車部隊を中心に繰り広げられた殷と周の戦い、もともと馬の飼育を専業としていた部族がつくった秦の大帝国など、本書を読めば、世界史を知る上で馬の存在が無視できないことが容易に分かるであろう。

③—費孝通は、文化大革命の時には厳しい批判にさらされたものの、改革開放以降はきわめて高い評価を得て、現代中国を代表する研究者となった。彼が手がけた研究分野は社会学および人類学・民族学へと広範囲に涉り、その理論と思想は、現代中国の社会政策と民族政策の根幹を形成している。本書は、彼の理論と生涯を簡潔にまとめ、中国社会に対する独自の概念装置と研究技法を明らかにするものである。

小林稔

(経営学科)

①『情報の文明学』梅棹忠夫 (中公文庫)

②『「複雑ネットワーク」とは何か——複雑な関係を読み解く新しいアプローチ』

増田直己、今野紀雄 (講談社)

③『論語』加地伸行 (角川ソフィア文庫)

①—国立民族学博物館および総合研究大学院大学名誉教授で文化人類学者の故梅棹忠夫氏が自らの情報化社会、情報産業に関連する研究をまとめて出版された一冊である。著者は、インターネットはおろかテレビがようやく一般家庭に普及し始めた一九六三年に「情報産業論」という論文を発表して、近い将来に情報化社会が到来し、また情報産業が経済に大きな影響を与えるようになることを論じていた。本書は「情報産業論」の発表から約三十年が経過した一九九五年に、「情報産業論」や著者のその後の情報と社会に関する研究について分かりやすく解説したものである。情報化社会といわれて久しい今日、情報化社会についてあらためて考える機会を与えてくれる教科書のような一冊である。

②—本書は、人と人とのつながりとしてのネットワークが今日の社会の中で重要な役割を担っていることをネットワーク理論や様々な事例を紹介しながら分かりやすく解説した一冊である。FacebookやTwitterなどのSNSの利用が進み、情報化社会からネットワーク社会へと進化しつつある現在の多様な出来事をネットワークという視点から考察している。SNSを日夜利用している学生のみならずぜひ読んでもらいたい。

③—ご存知の通り、中国の古典である論語を分かりやすく解説した一冊である。今日のような複雑で多様化した社会の中で多くの人々は、日々、困惑し、不安を抱え、今何をすべきかを模索して、しかし答えを見出せないでいる。もちろん私もその一人である。論語は、過去の賢人たちが様々な経験を通して、難しい人の世を生き抜くための一つの指針を提示している。この一冊は、その論語を誰でも理解でき

るように解説してある。若い学生のみならずにとっても、難しい現在の社会を生き抜くために、参考になるのではないだろうか。

坂爪洋美

(心理教育学科)

①『ハロワ！』久保寺健彦 (集英社)

②『僕たちはガンダムのジムである』常見陽平 (ワイルディングブックス)

③『「就社」社会の誕生——ホワイトカラーからブルーカラーへ』菅山真次 (名古屋大学出版会)

①「ハローワーク (通称ハロワ) で、求職者に就職先を紹介する相談員として働く沢田信 (二十八歳) の出会う様々な人々とのやり取り、悪戦苦闘、そして恋愛 (沢田は独身だが、相手の女性は既婚者) を描く小説。仕事を求めてハロワにやってくる様々な求職者 (大学四年生もいる) も皆個性的。沢田と求職者のクスッと笑えるやり取りがあるかと思えば、胸が痛むようなエピソードも。「働くって?」「仕事を

探すって?」「ハローワークって?」など色んな角度から楽しめる一冊です。

②「ガンダムのジムである」と言われて、今の学生諸君はピンとくるだろうか? ジムとザクの違いすらわからない私にとっては「?」という感じなのだが、私と同年代から少し下の男性陣は、この例えに心をわしづかみにされるらしい。「ごくごく限られたトップスター (ガンダム) を目指すのではなく、その他大勢 (ジム) として働くことにもっともっと自負を持とう!」というのが中心的主張。自分の中に何か焦りがあるような時に、読むと気がラクになる一冊です。

③「この本は表紙からして難しそうだし、これでもかという厚さ。課題図書にしたら、学生からのクレームが殺到するだろうと容易に想像できる、学生にとってはハードルが高い一冊でしょう。でも、とても読みごたえのある良い本です。今、多くの大学生が企業に就職し、サラリーマンとして働くことになりました。では、その仕組みはいつ、どのようにして始まったのでしょうか。自分達が当たり前なものとして考えている仕組みに目を向けましょう。一章でも良いので読んでみませんか?

佐藤勲 (芸術学科)

① 『あめつち』 川内倫子 (青幻舎)

② 『Moiré index』 Carsten Nicolai (Die Gestalten Verlag)

③ 『インプロビゼーション——即興演奏の彼方へ』 テレク・ベイリー (工作舎)

今回ご紹介するのは、言葉を読みながらも言葉の届かない領域へと向かう三人の表現者たちの写真と美しいパターン、そして音楽の本です。

①—写真は、とてもロジカルな芸術表現です。現代美術の文脈で語られる写真作品の多くは、言語的なコンセプトをもとに撮影され言葉に寄り添うことを好みます。そんな作品はきらびやかな語彙で語られ、いかにも美術っぽい。川内倫子さんの作品は言葉で説明するのがとても難しく、そこがいい。やわらかくて太くするどい感性がシャッターを切り、作品は言葉を軽々と飛び越え、見る人の衝動と知覚をゆっくりと深く刺激します。ささやかな一瞬が作品になると踏めるすばらしい才能と技術。『あめつち』は名作と言われる写真集と同じく、写真の選定や並べ方で作者の意思がハッキリと表現されています。「写真好きの眼」で見ると、「表現者の眼」で読むと絶対に楽しい本。紙と印刷の匂いもいい。

②—カールステン・ニコライは、いまもっともエッジにいる表現者のひとり。彼の音楽と美術作品のコンセプトは、一貫して美しい幾何学的な構造体造ることにあり、その幾何学構造は有機的な世界観にまで拡がりをみせます。『Moiré index』はニコライがシリーズ展開している幾何学的な図像集の一つ。この本では、数式による放物線グラフやグリッド、円やランダムなドットパターンなどをXY座標軸で数パーセント角度展開したり縮尺変換することで生じる美しきモアレ(斑紋)を集めています。規則性にズレを生じさせるのは、ミニマル・ミュージックの手法にも似ています。発想を展開し拡張する方法論は、さまざまな表現に通じるものがあり、数式好きにはたまらなく刺激的な視覚本。

③—メロディー、ハーモニー、リズム。ほとんどの音楽では、音と音につながりがあります。デレク・ベイリーは、このような既存の慣用句が成立しない「ノン・イディオム」という概念を用いて、音楽の極点に立ったフリー・インプロヴィゼーション（即興演奏）のギタリスト。新しい表現のために音の構造的な関係性を退け、一つ一つの音が分離し粒だつベイリーの演奏は、記譜法に縛られない直感と創造性が結実した希有な音楽です。聞きやすいとは言えませんが、突出した才能に触れた方はデレク・ベイリーを聞くのもいいでしょう。そしてこの本を読むと、ベイリーが別次元の音楽領域に達するために膨大な音楽理論を必要としたことが分かります。歴史を知り、それを乗り越えていくのは表現者の宿命のようです。

佐野誠子

（総合文化学科）

- ① 『宋詩概説』 吉川幸次郎（岩波文庫）
- ② 『獄中記』 佐藤優（岩波現代文庫）
- ③ 『時刻表2万キロ』 宮脇俊三（角川文庫）

①—書名通り、中国の宋代（九六〇—一二七九年）に作られた詩についての概説である。概説というと、やさしい本に感じるかもしれない。いまであれば、中国文学史に関する本は日本語でも中国語でも山のように出回っている。しかし、著者がこの本を書いた一九六二年当時は、そのような参考にできる概説書はほとんどなかった。自ら大量の作品と向かい合うことで、改めて、宋詩とはどのような特質を有しているのかを考え抜いて書いているところに感銘を受ける。

②—外交官だった著者が、背任及び偽計業務妨害容疑で逮捕・拘留された際に書

きためたノート及び担当弁護士や友人にあてた書簡を整理し、書籍化したもの。この獄中記、もちろん著者が逮捕に至ったいきさつについての回想も綴られているが、実は主要な内容は、獄中における、読書と思索の記録である。限られた冊数しか一度に入れられない中で、極限的な読書に圧倒される。なお、この獄中記にも書かれている読書術をハウツー化した本として同氏『読書の技法』（東洋経済新報社）もある。

③―過去に『WAKO Circle』でも披露したことがあるが、私は乗り鉄である。今現在も日本の鉄道のほぼすべてに乗車している。私が乗り鉄になるきっかけとなったのが、二十歳のころ図書館で出会い、そして、その後文庫本を購入したこの本である。著者の故宮脇俊三は元中央公論社の編集者。仕事の傍ら、国鉄（当時）の全線完乗を実行した、その記録である。二万キロとは、当時の国鉄の総営業キロ。乗りつぶしの旅とは、時刻表を駆使する知的ゲームであり、ローカル線には素朴な非日常が待っている。

清水雅貴

（経済学科）

- ① 『自動車の社会的費用』 宇沢弘文（岩波新書）
- ② 『格差と貧困がわかる20講』 牧野富夫、村上英吾（明石書店）
- ③ 『恋愛と贅沢と資本主義』 ヴェルナー・ゾンバルト（講談社学術文庫）

①―本書は、自動車が生社会に与えるマイナス面の影響を分析し、公害や交通事故による不幸な費用がどれだけ発生しているのかを世の中に知らしめた一冊。我が国における本格的な自動車の排出ガス規制は、この本が出版されてから数年後のことであった。環境経済学が取り扱う「社会的費用」や「外部不経済の内部化」といったエッセンスを理論からではなく、具体的な現状分析からわかりやすく解説した良書といえる。

②―本書は、「格差」や「貧困」といったキーワードを、「お金持ち」と「貧乏人」

といった単純な二元論で決めつけないで、社会、政治、財政、国際比較、医療、保健、労働など様々な視点から分析をしている。私たちの普段の生活にも格差と貧困の問題は顕在化しており、それらの原因と解決策を丁寧な解説とともに提供している。大学の講義をもとにして書かれているので非常に読みやすい。

③—本書は、一九一二年に経済史家によって発表されたもので、主に「恋愛と贅沢が近代資本主義を成立させた」といった、当時も今でも仰天するような仮説を論証している。その文章は若干難解であり、読後も著者の主張について何とも腑に落ちない気持ちが続くのだが、バブル経済やデフレ不況など、今日的経済現象に当てはめてみると妙に納得できてしまうところが面白い。反対に、禁欲的行動こそが資本主義発展の原動力であると説いたマックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経BP社）もあわせて読むことを薦める。

末木新

（心理教育学科）

①『自殺の対人関係理論——予防・治療の実践マニュアル』

Thomas E. Joiner Jr. ほか（日本評論社）

②『行動分析学入門』杉山尚子ほか（産業図書）

③『タイタンの妖女』カート・ヴォネガット・ジュニア（ハヤカワ文庫）

①—内容・文体のどちらを見ても、どう考えてもいわゆる精神科での臨床や心理面接に携わる専門家を対象にして書かれている本であるが、嚙り付きながら（？）なんとか読み進めてもらいたい。自殺学研究の初歩の問いである、「人はなぜ自殺をするのか?」「どういう人が自殺に至ってしまうのか?」という問いに十分答えの内容になっている。序章と終章だけを見ても自殺に対する理解は深まるため、まずは手にとってみてもらいたい。

②—同タイトル、同著者の新書があるが（そちらは副題がついている）、ここではこの本のタイトルを見たからには、是非、こちらの分厚い方の本を読んでほしい。タイトルには「入門」とあるが、行動分析学に関する教科書の決定版と言ってよいものである。我々の行動がどのように生起し、そして維持されているのかということを考える際に、行動分析学は必須のものである。素朴な「こころ」の概念にとらわれず、人間をとらえる目を養ってもらいたい。

③—一応、『タイタンの妖女』を挙げたが、カート・ヴォネガットの作品はどれも甲乙つけがたく迷ってしまう。他にも、『猫のゆりかご』『ローズウォーターさん あなたに神のお恵みを』（いずれも早川書房）あたりはどうせならまとめて目を通してほしい。ヴォネガット流の皮肉をまじえながら、人間の哀しさと美しさを満喫することができるのではないかと思う。ハヤカワ文庫に入っており、設定としてはそうなのであるが、主題はそこではない。

津田博幸

（総合文化学科）

- ① 『伝承と言語——上代の説話から』 佐佐木隆（ひつじ書房）
- ② 『入門 源氏物語』 三谷邦明（ちくま学芸文庫）
- ③ 『秋葉原事件——加藤智大の軌跡』 中島岳志（朝日文庫）

①—著者は古代語の構文論（語の並び方のコードを解明する議論）の観点から『万葉集』の歌の解釈をするというお堅い研究をしている人。この本はその言語学者としての凄みを生かしつつ、たぶんそれ故に暴走しているところがおもしろい本である。あの手堅い著者が「これは想像に過ぎないが……」と言いつつ危うい領域へと突っこんでゆくのだ。

具体的には、『古事記』『日本書紀』のストーリーが言葉の音や意味の連想をもとに構成され、展開していることを読み解く。たとえば天皇に反乱を起こした武埴たけはら安彦やすびの物語で、武埴安彦側の兵士たちが殺される直前に恐怖のあまり糞を漏らすと

いう尾籠な場面があるのだが、ここで彼らの漏糞が語られるのは反乱の主「武埴彦」の名の一部「埴」（ハニニ粘土）がイメージとして糞と置き換え可能で、連想が結びついているからだと言く。なるほど、『古事記』には、イザナミが火神を産んで火傷に苦しんでいるとき彼女が漏らした糞は粘土の神になったともある。

著者は、このように登場人物の名やキーワードからの連想がストーリーを生み出していているらしい例を次々と挙げてゆく。この発想は西郷信綱『古事記注釈』（筑摩書房）などを代表にこれまでも言われてきたことであるし、『不思議の国のアリス』など世界の文学にも広く見られる、物語生成の秘法の一つである。この言語学者は、その連想ゲームの探求をまるで意味の病にとり憑かれたように徹底してやっている。そこが凄い。ここには狂気の不安と同時に、解釈の悦楽境がある。同じ著者の『日本の神話伝説を読む——声から文字へ』（岩波書店）、『万葉歌を解説する』（日本放送出版協会）も氏の研究への入門としてお薦めである。

②—二〇〇七年に六十六歳で亡くなった『源氏物語』研究者が、彼の『源氏』読みの方法論を初学者向けにわかりやすくまとめた本。著者の根本的な文学観は「文学が開示する世界は狂気の世界だ」というところにある。当然、彼の『源氏』を読む方法は、いかに『源氏』の狂気を余すところなく發揮させるかにある。それは無限の決定不能性を生きるという、もどかしくもあり、不安でもある世界だが、同時に、言葉だけで構築された世界なのに、あるいはそうだからこそ、無限の妙味を味わい続けられる至福の世界でもある。

この人は、たぶん学校で習う古典文法などはまるで出来なかったのだろうと思う。たとえば、形容詞の連体形の語尾「……し」は「過去の助動詞だ」などと書いてしまったりする。学問の本としては失笑ものである。しかし、逆に言うと、この人はアカデミックな教育の影響はまったく受けずに子どもの天才性を保持したまま文学研究者になったのでは、とも思う。子どもが『源氏物語』を思う存分に遊んだらどんなに楽しいか。そういうことがわかる本である。

③—秋葉原で無差別殺傷事件を起こした人物の、事件に至るまでの軌跡を描いたルポルタージュ。読んでいるとこちらの心の一番柔らかいところが刺激されてヒリヒリと痛くなる本である。事件前の犯人による掲示板への膨大な書き込みが時系列

に即して解説されてゆくのだが、ネットの世界で彼の孤絶が進行してゆく様には凄まじいものがある。本人の裁判での説明によれば、結局、ネット上で生じたトラブル（なりすましにIDを盗まれる）に決着をつけるために、彼は現実の世界で事件を起こした。つまり、ネットの世界の自分を守ることが一番大事で、現実世界での殺傷はテレビゲームみたいなものになってしまっていた、という。確かに全体として彼の軌跡はそう進んだと読める（ただし、著者は、原因をそう単純化できるはずがないとも書いている）。

ネット上のコミュニケーションは匿名であるゆえに人の心の深部をさらし、また、深部まで届くと予測したのは森岡正博『意識通信』（筑摩書房）だったが、この本は、それがどれだけ深く人の心をえぐり取り傷つけるものであるかを教えてくれる。読む者の心が痛むのはそのせいである。

当間政義

（経営学科）

- ① 『マネジメントとは何か』 スティーブン P. ロビンズ（ソフトバンククリエティブ）
② 『どうやって社員が会社を変えたのか——企業変革ドキュメンタリー』

- ③ 『良心をもたない人たち』 マーサ・スタウト（草思社文庫）
柴田昌治、金井壽宏（日本経済新聞出版社）

①—組織マネジメントの分野における世界一わかりやすい教科書といえるだろう。前著は『マネジメントの正体——組織マネジメントを成功させる63の「人の活かし方」』と題され、千五百校以上の大学やカレッジの学生に使われた実績のある著書で、十九言語に翻訳され、これまでに六百万冊超を売り上げている。この著書は、前著書の最新版でタイトルも新たに、九部（五十九のケース）構成となっている。マネジメントの入門書として手元に一冊おいておくのも良いと思う。

②—経営学において、組織開発や組織変革は非常に重要なテーマの一つとなっている。対処策がうまくいかなければ、人間関係がもつれ組織が混乱するだけで、結局は元の機構の方がおさまりが良い結果となってしまふからである。これまで日本企業の強みであったチームワークが崩壊しつつある現代企業に対し、現実の対話から生まれた回顧によるリアリティとして、本書は、その処方箋をストーリーとしてわかりやすく説いている。

③—「一見魅力的だが、うそをついて人をあやつり、空涙を流して同情を引き、追いつめられると逆ギレをする」と、著書の帯に記してあるのを書店でみつけ思わず手に取った。二十五人に一人いるとされる良心をもたないサイコパスの実態を心理セラピストの著者が解き明かす。自らの私生活において、被害者にならないように、そして加害者にもならないように。このような人物の見分け方と対処するヒントを与えてくれるかもしれない。

堂前雅史

(身体環境共生学科)

- ①『和訳 聊齋志異』蒲松齡(柴田天馬訳) (ちくま学芸文庫)
- ②『科学の方法』中谷宇吉郎 (岩波新書)
- ③『生を肯定する——いのちの弁別にあらがうために』小松美彦ほか (青土社)

①—中国ファンタジー名作短編集。私自身は中学二年生の時に角川文庫版ではまってしまった。完訳版にどっぷりつかっていたので扉一枚向こうに神仙のスキヤンダルや狐の派閥闘争の世界が隣接している生活感に陥り、文字通り中二病をこじらせて現在に到っている。全四百四十六篇のうち三十五篇を選んだものなのでお手軽。すさまじく強引で術学的で幻想的なルビで有名な柴田天馬訳が復活したことは何よりもめでたい。ルビの力を知る上でも傑作。

②—五十年前に書かれた本なのだが、「科学でできることは何か?」「科学で

きないことは何か？」についての視点は色あせていないことに驚かされる。著者は雪の結晶についての物理学的研究の第一人者だが、漱石の弟子であった寺田寅彦に師事している随筆家でもある。自然科学の明晰さを伝えるのと同時に、自然科学という人間の認識の枠組みの限界を的確に指摘できるのは、科学では解析できない世界の重みを熟知しているからである。原子力発電事故を含めた科学技術批判が、冷静に論理的に語られねばならない時にふさわしい科学論入門。

③ 『生権力の歴史』（青土社）の入門書的な対談集。小松と外科医、社会学者、フランス哲学など、生命倫理に関わる各分野の研究者との対談によって、脳死・臓器移植や安楽死・尊厳死の問題が立体的に浮かび上がってきて、我々が「生かされている社会」にぞっとさせられる。生死とか意識って実はみんなが考えるよりも科学的にも医学的にもずっとずっと不確かなのだ。対談集なので、どこからでも好きなどころから読めばよい。ジョルジュ・アガンベンに興味のある人も、その現代的応用倫理としても読める。

徳永貴志

（経済学科）

- ① 『日本の国会——審議する立法府へ』 大山礼子（岩波新書）
- ② 『憲法を守るのは誰か』 青井未帆（幻冬舎ルネッサンス新書）
- ③ 『芸術の都パリ大図鑑——建築・美術・デザイン・歴史』

ジャン＝マリー・ベルズ・ド・モンク口（西村書店）

① 一〇一三年の参議院選挙の結果、「ねじれ国会」が久々に解消された。しかし、参議院には、第二院としては比較的強い権限が与えられているため、二大政党制を志向している限り、今後も「ねじれ」が生じる可能性が高いと言われている。下院と上院の多数派が一致しない事態は、どの国でもしばしば起こることだが、なぜ我が国では、これほどまでに「ねじれ」が問題とされるのか。本書は、同様の問題を抱える民主主義諸国と比較した日本の国会の特徴を理解するうえで欠かせない一冊である。

② 一三〇一三年の参議院選挙では、これまであまり焦点を当てられることがなかった憲法の改正要件が争点の一つに掲げられたこともあり、改めて、そもそも「憲法とは何か」について議論が盛り上がった。しかし、残念ながら、政治の世界でなされている憲法論議は、憲法に関する知識も理解も浅く、国家権力をコントロールするという憲法本来の意味が蔑ろにされている。本書は、自民党の改憲案を批判的に検討することを通じて、「憲法とは何か」について丁寧に解説してくれる。

③ フランスの首都パリは、誰もが一度は訪れてみたいと思う世界一の観光都市であるが、その魅力を支えているのは、その歴史の厚みである。そして、パリの街並みは、それ自身が大きな博物館となって悠久の歴史を我々に伝えてくれる。それは時代的断絶がなく、連続して街並みが更新されてきたパリの都市形成に起因する所だ。パリを旅行する際には、ガイドブックで観光名所をチェックした後、本書で、それと関連する建築、美術、デザイン、歴史を予習しておくことをお勧めする。

長尾洋子

(総合文化学科)

- ① 『麦ふみクーツェ』 いしいしんじ (新潮文庫)
- ② 『中東欧音楽の回路——ロマ・クレスマー・20世紀の前衛』 伊東信宏 (岩波書店、CD付)
- ③ 『めぐりあうものたちの群像——戦後日本の米軍基地と音楽 1945-1958』

青木深 (大月書店)

音と音楽をめぐる作品を三点。

① 一十七歳の孤独な少年ねこの物語だ。小さな港町の吹奏楽団を指揮する「おじいちゃん」のもとで育った彼は、故郷の島を離れて音楽修業の旅に出る。はじめに海を渡った先の都会の音楽学校には馴染めない。しかし、ねこにしか聞こえないはずの、不思議な麦ふみの音が聞こえるという盲目の元ボクサーや、毛むくじゃらの森の精のようなチェロ奏者の出会いを通じて、音楽と生命の根源に近づいていく。

「みはてぬ水平線のかなたまでえんえんとつづく、無限の海……そのはてのおぼろげな蜃気楼までが、弓のひとふりによってくつきりとよみがえり、次の瞬間、潮の流れにきえていく」。

②—ね、こを感嘆させたチェロ奏者の即興演奏は、②の附録CDにおさめられた音源とどこか響き合うだろう。本書はロマやユダヤ人など移動する民族の音楽や、社会の周縁にありながら多方面に影響を与えた楽師たちの姿をとらえ、彼／彼女らにまつわる物語を拾い集める。たとえば、シャガールの絵にでてくる路上のヴァイオリン弾きはどんな音楽を弾いたのだろう。モーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』のフィガロはなぜ「理髪師にして、なんでも屋」なのか。こうした素朴な疑問から、ヨーロッパ社会の周縁や古層に目をこらす。その眼力は、地下水脈をたどって、アメリカや日本にまでおよぶ。著者によれば、チンドン屋の音楽や昭和の流行歌、日本の映画音楽も、世界音楽の歴史の脈絡のなかでの出会いと無関係ではないのだからだ。

③—音楽を通じた目眩めくらめく出会い、そして、すれちがいさえもが、六百ページ以上を費やしてつづらられている。A篇、B篇とも鎌倉のダンスホール「リビエラ」の情景からはじまるが、いつしかそれぞれ異なる人びとの移動の軌跡をたどる。彼／彼女らがじつにさまざまな出自や文化的背景をもっていることには驚かされた。時間をおけたこまやかな取材が過去の音楽経験から、生の瞬間を掬すくいあげること成功している。扉に描かれた無数の星は、生の瞬間のきらめきであろう。そこからは、①に登場したチェロ奏者が若き日に独り、耳にした流れ星の音も聴こえてきそうだ。

野中浩一

(身体環境共生学科)

- ① 『原発事故後の日本を生きるということ』 小出裕章、中島哲演ほか (農山漁村文化協会)
- ② 『アントキノイノチ』 さだまさし (幻冬舎文庫)
- ③ 『虚構市立不条理中学校』 清水義範 (講談社文庫)

① 1・3・11の事故以降、小出さんの情報発信に耳を傾けたことのある人もいるだろう。二〇一二年には和光大学でも講演していただいた。小出さんの発言を短く切り取って、「高齢者は汚染食品を食べるべき」というふうには解釈するとおそらく誤解を招く部分もある。しかし、そう誤解をするくらいには関心をもってくれるならまだ良いかもしれない。そもそも、教室で放射線の話をして、あまりにも消極的・無関心の学生さんが多いことに私はいささかの危機感をもっている。これからの日本の骨格を決めるのは君たちなんだよ、と思わず力みたくなることもある。たしかに、アルファだベータだ、ベクレルだシーベルトだ、と理科系的雰囲気単語が登場しただけで、自分とは別世界のこととシャットアウトしたくなる人もいるかもしれない。だが、この本は、もっと根本から生き方を問うもので、そうした心配はない(だから易しいという本でもないが)。日常の暮らしてこうした生き方を突き詰めるのは、もしかすると息苦しいことかもしれない。私も四六時中考えてほしいとは思わない。しかし、少しだけ立ち止まって考える時間は、すべての学生さんにもってほしい。小出さんの「障害」とか「人権」に対する考え方は、ゼミなどの討論の場で学生に投げかけてみたい意見でもある。小出さんの著作はほかにも多数あるが、関心をもった人には、『今こそ「暗闇の思想」を——原発という絶望、松下竜一という希望』(二葉社)も紹介しておきたい。

② さだまさしというアーティスト、歌手として見たとき、その代表曲は私にはちょっとストライクゾーンを外れているのだが、(一度も行ったことのない)コンサートトークについては、それを集めたCDを買って繰り返し聞いてしまうほどのファンであり、じつに達人なものだいつも感心していた。だから、歌手という枠だけでは収まらない才人だとは思っていたが、まさか、小説にこんな才能があ

るとは想像していなかった。一見するとふざけているようなタイトルだが（そう思わない人はオヤジギャグの才能がないかもしれない、笑）、うかつにも心を揺さぶられてしまった。ほかのエッセイなどから推察すると、どうもこの人には、気になる出合いがあると徹底的に取材するという探究心が横溢しているようだ。本書も遺品整理業者「キーパーズ」との出合いが土台になっている。一人暮らし老人が増える日本における孤独死／孤立死の問題にもっとリアルな関心があるのなら、モデルになったキーパーズの社長の作品（たとえば、吉田太一『遺品整理屋は見た!!』（幻冬舎））もお勧め。若い人たちには実感のわかないテーマかもしれないが、人間の死と生について考えるきっかけにはなるだろう。あまりリアルな部分は娯楽としては勘弁だけど、さだまさしの作風が気に入ったという人には『眉山』『解夏』（いずれも幻冬舎）などもお勧め。

③—この著者を知らなければ、タイトルからだけではいったいどういうジャンルの本かよくわからないかもしれない。教育学部出身の著者が、作中作として提示した「教育という名の復讐」という論考のタイトルにはどきどきとする。復習ならぬ復「讐」なのだから。和光大学からすれば対極にありそうな、極端な管理教育の馬鹿ばかしさを笑い飛ばす、誇張されたフィクションの世界を楽しむという読み方でもじゅうぶんかもしれない。しかし、当時まだ新米教師だった私は、本書を読んでいるあいだじゅう、教師という人種が、自分が受けてきた教育をモデルにしてしか教育できないという業の深さを思い知って、いささかの戦慄をおぼえていた記憶がある。初版は一九九〇年。ゆとり教育の本格的導入やら、大学全入時代などが未来の時代の話である。しかし、そうした環境の変化がどうであれ、教師というのは自分が育ってきた教育モデル（教師はたいいてい、そのモデルの成功者という自覚がありそうな人種だ）をどれだけ離れられるのか、根源的な疑問をもった。ただし、本当のことをいえば、私はこの著者のパステイリッシュの才能や、おらかな青春小説のほうが好きであり、それがゆえに手にとった作品でもあった。個人的に再読したい作品は、『黄昏のカーニバル』（徳間書店）、『学問ノススメ』（光文社）、『いい奴じゃん』（講談社）といったものだという告白しておこう。

畑中朋子

(芸術学科)

①『マンハッタンのKurosawa——英語の字幕版はありますか?』

平野共余子 (清流出版)

②『プレイフル・ラーニング——ワークショップの源流と学びの未来』

上田信行、中原淳 (三省堂)

③『発想する会社!——世界最高のデザイン・ファームIDEOに学ぶイノベーションの技法』

トム・ケリー、ジョンナサン・リットマン (早川書房)

①—日米文化交流促進のため、ニューヨークのジャパン・ソサイエティーで日本映画の上映を十八年間手がけてきた女性の体験記。黒澤映画をはじめ現地で紹介された膨大な数の日本映画の題名と共に観客の反応、集客・広報の工夫などのグローバル・マーケティングの観点、関連団体との交渉や輸送中に行方不明となったフィルムの話などの危機管理、批評家や監督との交流などを含め、映像系のアートマネジメントの参考書として役立つ。四百七十ページという情報量だが、時にはハラハラしつつも読み応えがある「外からの目線」で日本文化を再認識することが出来る。本書がドキュメンタリー映画化されても、きっと見応えがあるだろう。

②—『プレイフル・ラーニング』とは、人々が集い、ともに楽しさを感じることでできるような活動やコミュニケーションを通じて、学び、気付き、変化すること日本のワークショップの第一人者、上田信行氏にお会いした当時、「学びはアート!」という独創的な発想と実行力に感銘を受けたが、その概念を論理化した本が未だ無かった。この本は、中原淳氏の論理的展開や図解によって、上田氏が米国滞在中に出会ったセサミストリートに始まり、自らが設計した実例などプレイフルな学習環境デザインの研究について、二十年間の軌跡が描かれている。その後、ワークショップが美術や教育の学会でも注目され、形に残しにくいこの概念について伝えやすくなったのは喜ばしいことだと思う。

③—アップル製品などで世界的に有名なデザイン会社、IDEOの役員らが「創

造性を高める職場環境」について語った本。原題は『The Art of Innovation』で、ビジネス書でありつつもカラー写真や事例が満載で、広くデザインを学ぶ人にとってワクワクする内容である。遊び心に富むオフィス空間、社員のモチベーションを高めるイベントや工夫、熱狂するブレインストーミングを生む秘訣、そして「コンセプトをまとめ」「デザインし」「実際につくる」という発想のプロセスが紹介されている。

葉山幸嗣

(経済学科)

① 『スタンド・バイ・ミー——恐怖の四季秋冬編』ステイヴン・キング (新潮文庫)

② 『貨幣と市場経済』J・R・ヒックス (東洋経済新報社)

③ 『経済超入門——ゼロからわかる経済学&世界経済の今』

ニューズウィーク日本版編集部編 (阪急コミュニケーションズ)

① 「普遍性」を備えた作品は優れた作品です。その意味で、本書は「優れた作品」と呼ぶのに相応しいでしょう。物語は、一九五〇年代のある夏、オレゴン州の小さな町に住む、十二歳の少年四人の冒険譚です。キングの真骨頂である一人称の語り口によって、冒頭から叙情的なストーリーに引き込まれるはず。なお、本書はロブ・ライナーによって映画化され、主題歌『スタンド・バイ・ミー』(ベン・E・キング)と共に大ヒットしました。キング作品の映画化に成功した数少ない作品の一つです。

② 本書はノーベル経済学賞を受賞した、ヒックス卿の集大成とも言える良書です。近代経済学が扱う諸問題を網羅しており、主流派経済学と一線を画す視点からヒックス卿の鋭い考察が加えられています。特に第二部「貨幣と金融」では庄巻の理論モデルを提示し、ケインズによる単純化された金融モデルの弱点を、見事に克服しています。本書は初級経済学を学修した、中上級者向けの内容ですので、併読書としてケインズ『雇用、利子および貨幣の一般理論』(岩波書店)を挙げておきます。

③—経済学のエッセンスを、お手軽に理解することができます。一トピック五分程度で読むことができます。執筆者は、誰もが一度は聞いたことのある、池上彰氏や池田信夫氏など、第一線で活躍するジャーナリストや経済学者です。ややとすると、難解になりがちな経済理論を、イラスト付きの解説でまとめている、経済学を「かじりたい!」という人にピッタリの内容ですよ。大学生であれば、本書をかばんに忍ばせ、通学の電車の中で読んでみては？

バンバン・ルディアント (経営学科)

① 『経済大国インドネシア——21世紀の成長条件』 佐藤百合 (中公新書)

② 『定本 想像の共同体——ナシヨナリズムの起源と流行』

ベネディクト・アンダーソン (書籍工房早山)

③ 『Kompas Ring of Fire』 (PT Kompas Cyber Media)

①—『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(阪急コミュニケーションズ)、『チャイナ・アズ・ナンバーワン』(東洋経済新報社)、そして最近『インド・アズ・ナンバーワン』(朝日新聞出版)があるのに、どうして「インドネシア・アズ・ナンバーワン」がないのかと思った人にこの書籍をお勧めします。佐藤百合さんの現職はジェトロアジア経済研究所の主任研究員でインドネシアの専門家としてよく知られています。この書籍は二〇一一年に書かれたため、データとしてもフレッシュです。現職のユドヨノ大統領はインドネシア国民の直接投票によって選ばれた初めての大統領で、二〇〇五年八月のアチェ和平協定が最も目立った活動として評価されています。そして、最近のニュースでも大きく取り上げられるKPK(汚職撲滅委員会)の活動でも知られています。このKPKは二〇一三年十月に憲法裁判所長官を逮捕し、インドネシア全土に衝撃が走りました。インドネシアの最新事情を知るにはこの書籍一冊で十分です。

②—ナシヨナリズムとは何でしょうか。そのような疑問をもつ人のためにこの本をお勧めします。私が初めてアンダーソン先生と会ったのは二〇〇九年八月、ニュー

ヨーク州イサカの自宅でした。スハルト独裁政権時に彼はブラックリストに載り、インドネシアへの入国を拒否されました。どうして彼は当時の政権に嫌われたのか、その理由はこの本の中にあります。「国」というのはあくまでも想像の共同体であり、独裁者は自分で想像したナショナリズムで権力を握っています。

③—この書籍はiPad用のデジタル書籍としてiTunesから購入できます。英語で書かれています。写真がたくさん載っていて読みやすいです。インドネシアの火山帯地域について、Kompas（インドネシア最大の全国新聞）の記者による二年間の取材をもとに、歴史的、文化的に概説されています。

メアリー・シェリーがフランケンシュタインを生み出した背景には、一八一五年四月のインドネシアのタンボラ山の噴火があるという説があります。その噴火の影響でヨーロッパでは異常低温で不作、食糧不足になり、翌一八一六年は「夏のない年」と言われ、まさにフランケンシュタインの物語のような環境になりました。インドネシアにおける火山、地震、津波の歴史を一冊にまとめた書籍はこれしかありません。

なお、Lead WriterであるAhmad Ari氏は、二〇一三年度に和光大学に客員研究員として在籍していました。

平井宏典（経営学科）

①『深夜特急—香港・マカオ』 沢木耕太郎（新潮文庫）

②『独立国家のつくりかた』坂口恭平（講談社現代新書）

③『『新訳』経験経済—脱コモディティ化のマーケティング戦略』

B・J・パインⅡ、J・H・ギルモア（ダイヤモンド社）

①—遡ること十数年前、人気芸人の有吉さんがユーラシア大陸をヒッチハイクだけで横断するというテレビ番組の企画があり、その元ネタとなったのがこの『深夜特急』（実話）です。本ではヒッチハイクではなく「乗合いバスだけ」で、インドのニューデリーからロンドンという旅路の設定。だけど、スタート地点に到達さえ

していない「香港・マカオ編」が面白い。香港の熱気とマカオのカジノが、賢明な旅ではなく酔狂な側に身を置くというこの旅のスタンスを形成していきます。旅をすることの意味や楽しみを教えてくれる本です。

② 新政府初代内閣総理大臣である現代アーティスト坂口恭平氏の本です。「独立国家をつくる」といっても単なる思考実験ではなく、いたって真剣に取り組んでいます。そのきっかけは子どもの頃から著者が考えていた八つの質問に誰も答えてくれなかったから。そのひとつが「なぜ人間だけがお金がないと生きのびることができないのか？そして、それは本当か？」。その問いに対して著者が出した答えが「態度経済」です。この考え方が正しいかどうかはともかく、社会のあり方や価値基準を根本から考え直す面白いきっかけになると思います。

③ 現在、経営学の世界では製品やサービスの価値のあり方が変わってきています。例えば、製品やサービスが作られる工程はあくまで過程でしたが、今ではこのプロセス自体や価値交換（購入）後にも価値があると考えられています。そして、価値そのものにも新たな概念が生まれつつあります。そのひとつが経験価値です。この本で示される「コーヒーの価格推移」の図はとても有名です。また皆さんが大好きなディズニーがなぜ素晴らしいかを理論的に教えてくれる本でもあります。

平尾さく江（心理教育学科）

① 『育ちあう風景』清水玲子（ひとなる書房）

② 『母の色えんびつ——詩画集』松崎運之助（北水）

③ 『野菜大好き！子どもに人気の野菜料理』食べ物文化編集部編（母ばえ社）

① 本書の著者は「保育の悩みや願いの中にこそ保育研究の課題がある」とする一貫した姿勢で、保育現場に向かれています。そこで聞き取った保育者や保護者の悩み、喜びなどをエッセイとして書き綴ったものが本書にまとめられています。子どものこと、おとなのこと、保育者のこと、社会と保育、そして筆者自身のこと

という内容の中に、共感すること、深く考えさせられること、励まされることがたくさん詰まっている一冊です。

②—本書の著者は、山田洋次監督の映画『学校』のモデルになった夜間中学の先生です。そのお母さんが描かれたえんぴつ画と、夜間中学で出会った方の言葉で綴られていて、優しい気持ちになれる一冊です。その言葉をひとつご紹介しますね。

「あいうえお」ってステキね

ほら、「あいうえお」って

「あい」から始まっている

何でも「愛」から始まるのよね

③—最近若い人とおしゃべりをして、野菜の話で盛り上がりました。子どもが野菜を食べない、もっと美味しく食べるには等々。そうか！と本箱から探したこの一冊。「子どもは本当に野菜が嫌いか」と問いかげ、保育園で子どもが好きな野菜

レシピを掲載。簡単クッキングのお料理満載です。あなたの食卓にも是非どうぞ。

福田好裕

(経営学科)

① 『ドン・キホーテ』全六巻 セルバンテス (岩波文庫)

② 『現代語訳 般若心経』玄侑宗久 (ちくま新書)

③ 『行為する組織——組織と管理の理論についての社会科学的基盤』

J・D・トンブソン (同文館出版)

①—今や大型ディスカウンドストアの名称として有名。せいぜい子供の頃、絵本やアニメで見たことがある程度。岩波文庫でさらに全六巻という出版社の堅さと長さには食指が動かず。読まないままではもったいないほどの超面白本。抱腹絶倒奇想天外厚顔無恥。組織論の大御所ジェームズ・マーチ (スタンフォード大学名誉教授) はこの小説を取り上げ、リーダーシップについて論じている。主人公と従

者をはじめとする周りの人々との微妙な関係に注意。

②—臨済宗の住職で芥川賞作家でもある著者が説く般若心経についての訳本。年齢を重ねるにつれて耳にする回数が増えてくる。意味はわからず。その調べは眠りを誘う睡眠導入剤。木魚を加えてオリエンタルビート。繰り返し唱えればいつの間にか心静かに。内容がわかると更なる成長が。ひらがなで読み方も示しているだけでなく絵による「当て絵」の置き換えも実に面白い。中身はさらに面白い。

③—組織論の古典中の古典。コンティンジェンシー（環境適合）理論の端緒。ごく簡単に言えば、「状況によって正しい方法は変わってくる」。新訳が二〇一二年に出版され手にしやすく読みやすくなった。とはいえスラスラサラサラとはいかずノートにまとめながら、出来れば原著も片手に、じっくり取り組むべし。丹念に読めば目から鱗。読み返すたびに再発見。経営学・組織論・戦略論を理詰めで考えたい人に。流行や現象ばかりを追っかけるのが経営学ではありません。きちんとした理論は役に立つ。

松枝到

（芸術学科）

- ①『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』ステイーヴン・グリンブラット（柏書房）
- ②『そのとき、本が生まれた』アレックス・サンドロ・マルツォ・マーニョ（柏書房）
- ③『メディアとしての紙の文化史』ローター・ミュラー（東洋書林）

①—イタリヤの人文学者ボッジオ・ブラッチョリーニが、一四一七年、南ドイツの忘れ去られたような小さな修道院を訪れ、その書庫を探索したあげくにある写本を発見するところからこの本ははじまる。その写本とは、古代ローマのルクレティウスが詩文体で綴った自然学の書『事物の本質について』にはかならない。ルネサンス期の熱狂的な写本探索を描く「ブックハンター」にはじまるこの一書は、書物という事物が世界を変える可能性をもつことを明らかにしている。きわめて刺激的なドキュメント。原書名『The Swerve』。「ゆがみ」の意。と邦題とがまるで違うので困ったものだが（それでばくは邦訳の発見が遅れた）、書物に関心がある人な

らば、必読書。

②—十六世紀のヴェネツィアはグーテンベルク以後の出版革命の中心地であり、その代表格がアルド・マヌーツィオ（ラテン名、アルドゥス・マグネティウス）であった。この人物は、ブックデザインやフォントの改革のみならず、出版社・編集者として宗教改革運動に深くコミットし、ルター、デューラー、メランヒトンなどとも共同作業をしている。コンピュータ・ソフト・メーカーのアドビ社は、その旧名をアルダスといい、これはアルドゥスの英語読みであり、その商標はアルドゥスの肖像画であった。本書はそのアルドゥスの活動の軌跡をたどるもの。いささかイタリヤ資料に偏っていることは指摘しておく。これも邦題訳に問題があるが、書物に関心がある人ならば、必読書。

③—紙という素材がアジアから西欧世界に浸透してゆくなかで、パピュルスや羊皮紙に固執していた修道院のような閉鎖社会を離れて、どのように人々は社会生活のなかで紙を発見し、それを活用してきたかを多くの具体例を引きつつ活写する。

紙は本や新聞ばかりでなく、メモ、手紙、書類、証書、その他さまざまな場面で動きはじめる。紙なしではありえない現代社会を見つめ直すうえで重要。書物に関心がある人ならば、必読書。

松村一男

（総合文化学科）

- ①『神の文化史事典』松村一男、平藤喜久子ほか編（白水社）
- ②『神話思考Ⅰ——自然と人間』松村一男（言叢社）
- ③『OL委員会秘宝館スペシャル——日本の田舎はどこだ』清水ちなみ（幻冬舎文庫）

①—私を中心となって作った神話事典である。大きすぎて授業では使えない。しかし参照するためより読むための事典として構想した。世界中の神話から九百の重要あるいは面白そうな神々を選択し、四十四人の執筆者も選定し、全部の項目をチェックして統一した。それぞれの神の特徴のキーワードや同じような性格の他の

神へのリンクもつけた。物凄い重労働であった。だからそれだけの価値のある、他に類書のない、しかも読みやすい神話事典になっている。読んでみてくれ！

②—私の論文集である。「神話学の歴史と理論」、「インド・ヨーロッパ神話」、「ギリシア・ローマ神話と聖書」という三つの部門に分けて三十七の論文が入っている。目次を眺めるとテーマが異様に広すぎると思うかも知れない。しかし出鱈目に選んでいるのでも、いい加減にウソを書きならべているのでもない。すべて真面目に書いているし、役立つ内容のはずである。そして続編の『神話思考Ⅱ』も出版予定である。こちらでは日本の神話や宗教、そして現代の神話についての論文が中心となる。この論文集は前の事典と違い、眺めるだけで（も）いい！

③—清水ちなみは二十代で全国のOL五百人以上を組織してOL委員会を立ち上げ（後に会員は五千人以上となる）、『おじさん改造講座』（文藝春秋）をまとめ、OLの目から見た会社のおじさん（「オジ」と呼ぶ）の生態を生々しく描き出した。同じことを日本各地に残る風習についてまとめたのが本書。フェミニズムと民俗学

が合体した超娯楽的な超領域的報告！ 私も君たちも知らない「不思議の国ニッポン」がまだまだあることが分かる。

三上豊（芸術学科）

①『西洋絵画の歴史Ⅰ—ルネサンスの驚愕』遠山公一（小学館101ビジュアル新書）

②『殺人者の顔』ヘニング・マンケル（創元推理文庫）

③『冬のプロスト』上・下 R・D・ウイングフィールド（創元推理文庫）

忙しいときに推理小説を読む。閑なときも読む。超忙しいときには読めずにイライラする。映画も映画館で見る。忙しいときにも見る。超忙しいと見られなくなり、ゲッソリする。

①—二〇一三年十月に出た。「ルネサンスの驚愕」というサブタイトルがついて

いるが、それほど驚くことはない。しかし、従来の作品掲載とちがって、フレスク画など周囲の壁面もほどよく入れてあり、また色彩もほどよくどぎついのがいい。入門書として読んでもらいたいが、あと二冊、近代まで出るとのこと。すると三千万を超えてしまう。好みの時代からどうぞ。

②—②、③は、すでにシリーズとして定評のある刑事ものから例としてあげてみた。②のシリーズはここ数年注目の北欧ミステリーのひとつで、田舎町に突然すごい事件が起こり、読み手もどんどん事件に巻き込まれていくような感覚が起き、一気読み。北欧ものを読んでいると、名作マルティン・ベックシリーズを思い出す。どうもそれが発端らしい。

③—架空のイギリスの田舎町が舞台だが、情景がよく描かれている。下品が売りの刑事フロストが主役で、笑いが絶えない。笑えて推理も楽しめ、二度おいしい、どこかのキャラメルのような作品。テレビ版(DVD)は下品さが消えておりお勧めできない。マイクル・コナリーやジェフリー・ディーヴァーによるアメリカ

の刑事ものも好きなシリーズだが、書棚の占有率が高くなるのが悩みとなる。

道場親信

(現代社会学科)

- ① 『「難死」の思想』小田実 (岩波現代文庫)
- ② 『出ニッポン記』上野英信 (現代教養文庫)
- ③ 『危険社会—新しい近代への道』ウルリヒ・ベック (法政大学出版局)

①—二〇〇七年に亡くなった作家、小田実の思想のエッセンスが圧縮された論文集。一九六〇年代のベトナム反戦運動の中で小田が見出した戦争の中での人間のあり方をとらえるキー概念、「難死」と「加害者／被害者」論を軸に、小田の思想の展開がたどれるようになっていく。戦争や災害の中で、人は「無意味な死」というほかない死に方を国家によって強いられることがある。この無意味な死を無理に意味づけるのでなく、その死が強いられた構造を変えていくことが人間の思想と行動

の意味だとする。また、人は加害者になりたくないと思っても加害者である立場を強いられることがある。加害者にされてしまうことで被害者でもある。しかし、その被害者意識に埋没して誰かのせいにするだけでは、加害者であることから逃れられない。加害者であり被害者であることを強いる構造を変えること、そのためにねばり強く続けられた思索の軌跡からたくさんのことを学んでほしい。

②―炭鉱地帯である福岡県の筑豊地域に拠点を置いて記録文学を書き続けた著者による、重厚な作品である。日本の近代化を支えた炭坑が五〇年代後半から続々とスクラップ化されていったとき、失業した元坑夫たちの一部は「農業移民」として南米各地へ生活の場を移していった。その彼らの足跡を追って、上野は七〇年代初めに南米に渡る。随所で万感の思いに打たれて滂沱の涙を流すとともに、人々の生きざまに寄り添って記録を刻みつけようとする著者の心の揺れが描き込まれている。何度読んでも同じところで泣いてしまうこの本は、日本の近代が何であったかを考える上で外すことのできない思いを伝えてくれる。

③―その近代化がもたらした産業社会と流動化した社会がどのような形で人々にリスクをもたらししているのか、またその状況の中で新しい政治をつくり出していく可能性はどのようなものであるのかについて考察している。原発事故と雇用の不安定化という、一見別々に見える問題を貫いて存在する「リスク社会化」という問題を解説し、専門家に任せずに人びと自身が科学や社会のあり方を考え、学び、抗議し、交渉し、社会のあり方に関わりをもっていくという新しい政治の可能性に対して、著者はペシミズムに陥らずに希望的な姿勢を貫いている。そのことがものごとを考え続ける勇気を支えてくれる。

村井紀

(総合文化学科)

- ①『雨月物語』 上田秋成 (ちくま学芸文庫)
- ②『神聖喜劇』全五巻 大西巨人 (光文社文庫)
- ③『明石海人歌集』 村井紀編 (岩波文庫)

①—江戸期随一のインテリ(文人) 上田秋成の『雨月物語』は、古典中の最高傑作だと思ふ。たとえば第一話「白峰」は、帝位をめぐる怨霊となって世を戦乱に導く魔王崇徳院(百人一首の一人)と、互いに儒仏神の知をあげて「論争」し、歌を手向けてやっとなだめる歌聖西行がいる。また戦乱を背景に、日本と中国のソボクな怨霊・亡霊説話を秋成は、膨大な知識を交え、亡霊となって再会する夫婦の愛の物語(浅茅が宿)、再会の約束を自殺し亡霊となって果たす友情の物語(菊花の約)として独創的に編みなおすのだ。文中に「交わりは軽薄の人と結ぶことなかれ」ということばがあって、いたって軽薄な私には、ひどくこたえた記憶がある(「走

れメロス」だって? つまり王様が登場するメダタシメダタシのオハナシ、こういうのを子供だまし、というのだよ)。

②—大西巨人の『神聖喜劇』(全五巻)は、二十歳の主人公東堂太郎の軍隊生活の日々の「闘争」を描いた小説である。ただ、この作品の醍醐味は、主人公の「浅学(者)のよろこび」(第四巻)が語られ、読者もまたその恩恵を受けることができることである。古事記・神道ぐるいの引きこもり本居宣長を、ふところオヤジ、コジキ伝兵衛と揶揄した秋成が活躍した文化・文政期の詩文・思想から欧米に学んだ近代日本の文学と思想のポイントをつまりは諸個人の生き方を、主人公から学べるのだ。文学が「学問」だ(『広辞苑』より)ということも納得できらるだろう。

③—ついでながら、私は『明石海人歌集』を編み、解説を書くにあたり、東堂太郎がふれた木下李太郎(「癩医学者」 太田正雄)を手がかりにした。明石海人は、使い古された形式Ⅱ短歌によってハンセン病をとらえ、国家の医療を批判し、存在そのものを問いただし、独自の世界を創出した。なんと彼は、星と遊び、譜面とし

て音を奏で、この二十一世紀を先取りして!? 宇宙船から見た地球を作品化させし
ている。

星の座をかなたこなたに置きならべこの夜のはての夢おしはかる
星の座を指にかざせばそこここに散らばれる譜のみな鳴り交す^{かぶ}
さかさまに大地流るる頭の上ともかくにも星が光れり

森下直紀

(経済学科)

①「一握の砂」「時代閉塞の現状」(『石川啄木』所収 筑摩書房)

②『論文作法——調査・研究・執筆の技術と手順』ウンベルト・エコ(而立書房)

③『野生のうたが聞こえる』アルド・レオポルド(講談社学術文庫)

①—本書に収録された「時代閉塞の現状」という評論を読むと、「社会」は進歩

しないのではないか、という疑念に襲われる。石川啄木が、周囲の思想家たちに向
けて書いたこの文章の背景として描かれる社会状況は、今日の社会問題として考
えられている諸問題と本質的に同じように感じられる。今読むと難解な言葉が多く、
難しい文章だが、二十代前半の青年が残した社会に対する考えをぜひ読み解いてほ
しい。

②—卒業論文とは何か。何に役立つか——。この書は、人文社会科学系の諸学部
における卒業論文の手順を示した手引書として執筆された。エーコは、卒業論文の
目的を「諸種の基礎知識の採集としての勉強」ではなく、「諸問題の所在を突きとめ、
それらに方法をもって対処し、それらがある種の伝達技術に則して説明するための
能力(将来の生活にとって有用な能力)の獲得」としている。卒業論文への手引書
となるばかりか、今後の人生への良き指南書となるのではないだろうか。

③—原書名を訳すと「砂土地方の暦」となるこの本は、「土地倫理」という章に
おいて、自然との共生という考えを広めた古典とされている。レオポルドは長年、

米国有林行政に携わってきた。一年十二カ月の暦の記述と北米各地のスケッチとともに、森林の管理という現場の目線から、自然への愛を綴る本書は、現代社会に生きる私たちの自然におけるありようを問いかけている。

ユ・ヒョジョン

(現代社会学科)

- ① 『在日外国人——法の壁、心の溝』 第三版 田中宏 (岩波新書)
- ② 『領土問題をどう解決するか——対立から対話へ』 和田春樹 (平凡社新書)
- ③ 『沖縄現代史』 新版 新崎盛暉 (岩波新書)

① 一九六〇年代のアジアからの留学生との出会いから始まった筆者の現場体験の軌跡をたどりながら、在日・韓国朝鮮人問題に端的に集約されている日本の民族差別・国籍差別に関する法的・社会的問題を統計データや法律をもとに概観できるロングセラーの最新版。日本による朝鮮半島の植民地支配、中国などのアジアへの

侵略戦争の歴史を直視すること、外国人と「ともに生きる」社会を築くために知恵を絞る、発想を転換していくことの重要性和必要性が説得的に述べられている。高校無償化の対象から朝鮮学校が除外された問題、二〇〇六年に韓国で実施された定住外国人への地方参政権導入などの最近の動向も紹介されている。「民族」「国籍」「人権」とは何かを考えた人にとっての基礎文献としてもおすすめ。

② ーロシア、韓国、中国三国との領土問題はすべて一九四五年八月十五日に起因しているという立場から、北方領土問題をめぐる日露両国間の交渉の経緯を詳細に跡づけつつ、そこに内在している日本側の姿勢の問題点やその背後で大きな影響を及ぼしていたアメリカのかわり方の問題点などを克明に記している。そして、ここから学び取るべき教訓を竹島(独島)問題や尖閣諸島(釣魚台列島)問題にも適用し、「対立から対話」への「精神の革命」を通じて平和的に問題を解決することと呼びかけている。日本を代表するロシア史・北朝鮮現代史家による渾身の著。

③ ー沖縄の戦後史は、米軍支配下の時期と一九七二年の日本への返還以後の時期

に分けられるが、一貫して変わらないのは沖縄が日米同盟の軍事的根幹部分をなしている点である。本書は沖縄戦から復帰を経て米軍再編協議が進行する二〇〇〇年代前半までを取り上げた通史であり、同時に、基地問題に対する沖縄の民衆の粘り強い闘いの歩みをも具体的に記している。二〇一三年九月現在、普天間基地の移転問題やオスプレイの配備といった米軍基地が沖縄に集中する状況に由来する問題の構造は変わらず、このような状況に対する沖縄の人々の怒りは頂点に達しているように映る。現在の沖縄が置かれた状況を理解し、日本人がいま何をすべきかを考えるために必読の一冊。米軍支配下の時期を扱った中野好夫との共著『沖縄戦後史』（岩波書店）と併せて読むことで理解がより深まるだろう。

米田幸弘

（現代社会学科）

- ① 『この世でいちばん大事な「カネ」の話』西原理恵子（イースト・プレス）
- ② 『降りていく生き方——「べてるの家」が歩む、もうひとつの道』横川和夫（太郎次郎社）
- ③ 『母親やめてもいいですか——娘が発達障害と診断されて……』

山口かこ文、にしかわたく絵（かもがわ出版）

① — 「カネ」が無いというのは、単にモノが買えないということではない。単にひもじいということではない。貧困がいかにも人を追いつめ、暴力と結びつき、生きる希望を失わせていくのか、自身の幼少体験を踏まえてわかりやすく語っている。怒涛の勢いで作品を生み出し続けるサイバラ氏の原点がここにある。あの辛く苦しい場所から抜け出すために、彼女は必死に走り続けてきたのだ。文庫版の解説を書いた某評論家氏は、この本を読んで号泣したそう。

②―統合失調症などの精神障がいを抱えた人びとの地域活動拠点、社会福祉法人「べてるの家」のルポルターージュ。精神医療の関係者に衝撃を与えた「べてるの家」の実践が教えてくれるのは、単なる病氣回復のノウハウではない。人は苦しみの経験によってこそ、新たにつながりうるといふ希望だ。「べてる」が当事者や医療関係者にとどまらず多くの人たちを惹きつける理由はそこにあると思う。

③―発達障がいの娘を受け入れることができなかった母親の体験記（コミックエッセイ）である。発達障がい児の子育ての辛さから、育児放棄や不倫に走り、離婚して子どもを手放すことになった作者のことを「ひどい母親」「身勝手すぎる」と批判するのは簡単だ。このような本を出版することへの批判もある（卑怯な自己正当化だ、娘が読んだらどう思うか等）。しかし、発達障がい育児に苦しむ母親から「読んで救われた」「共感した」という声があるように、当事者はキレイごとで片付けられない深刻な問題を抱えている。いわゆる「良い本」だからではなく、そのことを考えさせてくれる本だからあえて挙げた。

※『本を読もう！』第一集から第四集およびその他の図書・情報館の刊行物はホームページ(<http://www.wako.ac.jp/library/>)でも公開しています。

114 『Moiré index』 Carsten Nicolai

Die Gestalten Verlag 2010年 5,560円

や行

115 『野菜大好き！子どもに人気の野菜料理』 食べもの文化編集部編

芽ばえ社 2000年 1,300円

116 『野生のうたが聞こえる』 アルド・レオポルド

講談社《文庫》1997年 1,103円

117 『ヤバい経営学——世界のビジネスで行われている不都合な真実』

フリーク・ヴァーミュレン

東洋経済新報社 2013年 1,680円

118 『山口昌男コレクション』 今福龍太編

筑摩書房《文庫》2013年 1,995円

119 『ユーピック』 フィリップ・K・ディック

早川書房《文庫》1978年 861円

ら行

120 『良心をもたない人たち』 マーサ・スタウト

草思社《文庫》2012年 798円

121 『領土問題をどう解決するか——対立から対話へ』

和田春樹

平凡社《新書》2012年 840円

122 『恋愛と贅沢と資本主義』 ヴェルナー・ゾンバルト

講談社《文庫》2000年 1,208円

123 『路傍の石』 山本有三

新潮社《文庫》2003年 987円

124 『論語』 加地伸行

角川書店《文庫》2004年 700円

125 『論文作法——調査・研究・執筆の技術と手順』 ウンベルト・エコ

而立書房 1991年 1,995円

わ行

126 『和訳 聊齋志異』 蒲松齡

筑摩書房《文庫》2012年 1,470円

- このリストは『本を読もう！』（第四集）の本文で紹介されている本を、五十音順に配列したものです。データは、書名、著者名、出版社、出版年、価格の順で記してあります。
- 作品によっては様々な出版年、出版社から出版されていることもあります。比較的購入しやすいものを優先して掲載しています。
- 価格は2013年12月時点での税込表示です。「@」は多巻本の単価を表し、また、「@○円～□円」は各巻の価格帯を表します。洋書は参考価格です。
- 原則として図書・情報館で所蔵していますが、入手困難につき所蔵できなかったものも数点あります。お困りの際は、図書・情報館カウンターでご相談ください。

- 91 『発想する会社！——世界最高のデザイン・ファームIDEOに学ぶ
イノベーションの技法』 トム・ケリー、ジョナサン・リットマン
早川書房 2002年 3,150円
- 92 『母親やめてもいいですか——娘が発達障害と診断されて…』
山口かこ文、にしかわたく絵
かもがわ出版 2013年 1,470円
- 93 『母の色えんぴつ——詩画集』 松崎運之助
北水 2000年 1,365円
- 94 『ハロワ!』 久保寺健彦
集英社 2011年 1,575円
- 95 『費孝通——民族自省の社会学』 佐々木衛
東信堂 2003年 1,890円
- 96 『漂海民』 羽原又吉
岩波書店《新書》1992年 777円
- 97 『「複雑ネットワーク」とは何か
——複雑な関係を読み解く新しいアプローチ』 増田直紀、今野紀雄
講談社 2006年 945円
- 98 『武士の家計簿——「加賀藩御算用者」の幕末維新』 磯田道史
新潮社《新書》2003年 714円
- 99 『冬のプロスト』上・下 R・D・ウィングフィールド
東京創元社《文庫》2013年 @1,365円
- 100 『プレイフル・ラーニング——ワークショップの源流と学びの未来』
上田信行、中原淳
三省堂 2013年 2,625円
- 101 『ブレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』
アルベルト・メルツ
ハーベスト社 2008年 2,940円
- 102 『暴走する資本主義』 ロバート・B・ライシュ
東洋経済新報社 2008年 2,100円

- 103 『僕たちはガンダムのジムである』 常見陽平
ヴィレッジブックス 2012年 1,000円

ま行

- 104 『マイ仏教』 みうらじゅん
新潮社《新書》2011年 714円
- 105 『学び続ける力』 池上彰
講談社《新書》2013年 756円
- 106 『マネジメントとは何か』 スティーブン P. ロビンズ
ソフトバンククリエイティブ 2013年 1,680円
- 107 『マンハッタンのKurosawa——英語の字幕版はありますか?』
平野共余子
清流出版 2006年 2,100円
- 108 『ミシンと日本の近代——消費者の創出』 アンドルー・ゴードン
みすず書房 2013年 3,570円
- 109 『麦ふみクーツェ』 いしいしんじ
新潮社《文庫》2005年 746円
- 110 『村の遊び日——自治の源流を探る』 増補 古川貞雄
農山漁村文化協会 2003年 1,800円
- 111 『めぐりあうものたちの群像
——戦後日本の米軍基地と音楽1945-1958』 青木深
大月書店 2013年 5,460円
- 112 『メディアとしての紙の文化史』 ローター・ミュラー
東洋書林 2013年 4,725円
- 113 『メディア論——人間の拡張の諸相』 M・マクルーハン
みすず書房 1987年 6,090円

た行

- 70 『大学生と語る性——インタビューから浮かび上がる
現代セクシュアリティ』 田村公江、細谷実編著
晃洋書房 2011年 2,625円
- 71 『タイタンの妖女』 カート・ヴォネガット・ジュニア
早川書房《文庫》2009年 798円
- 72 『中東欧音楽の回路——ロマ・クレズマー・20世紀の前衛』
伊東信宏
岩波書店 2009年 3,045円
- 73 『ディアローグ——ドゥルーズの思想』
ジル・ドゥルーズ、クレール・パルネ
河出書房新社《文庫》2011年 1,260円
- 74 『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』
ベネディクト・アンダーソン
書籍工房早山 2009年 2,100円
- 75 『鉄で海がよみがえる』 畠山重篤
文藝春秋《文庫》2012年 520円
- 76 『伝承と言語——上代の説話から』 佐佐木隆
ひつじ書房 1995年 4,410円
- 77 『ドイツのロック音楽
——またはカン、ファウスト、クラフトワーク』 第二版 明石政紀
木声社 2003年 2,625円
- 78 『どうやって社員が会社を変えたのか
——企業変革ドキュメンタリー』 柴田昌治、金井壽宏
日本経済新聞出版社 2013年 1,785円
- 79 『特命全権大使米欧回覧実記』 全5巻 久米邦武編
岩波書店《文庫》1996年 @840～1,008円
- 80 『独立国家のつくりかた』 坂口恭平
講談社《新書》2012年 798円

- 81 『ドン・キホーテ』 全6巻 セルバンテス
岩波書店《文庫》2001年 @798～945円

な行

- 82 『何者』 朝井リョウ
新潮社 2012年 1,575円
- 83 『ナポリへの道』 片岡義男
東京書籍 2008年 1,365円
- 84 『「難死」の思想』 小田実
岩波書店《文庫》2008年 1,050円
- 85 『にほんごの話』 谷川俊太郎、和合亮一
青土社 2010年 1,470円
- 86 『日本人のしつけは衰退したか——「教育する家族」のゆくえ』
広田照幸
講談社《新書》1999年 777円
- 87 『日本の国会——審議する立法院へ』 大山礼子
岩波書店《新書》2011年 840円
- 88 『日本のデザイン——美意識がつくる未来』 原研哉
岩波書店《新書》2011年 840円
- 89 『入門 源氏物語』 三谷邦明
筑摩書房 1997年 840円

は行

- 90 『働く過剰——大人のための若者読本』 玄田有史
NTT出版 2005年 2,415円

- 46 『自殺の対人関係理論——予防・治療の実践マニュアル』
Thomas E. Joiner Jr. ほか
日本評論社 2011年 4,200円
- 47 『詞集 たいまつⅠ』 むのたけじ
評論社 1989年 1,050円
- 48 『自動車の社会的費用』 宇沢弘文
岩波書店《新書》1992年 735円
- 49 『詩とことば』 荒川洋治
岩波書店《文庫》2012年 903円
- 50 『シャントラム』全3巻
グレゴリー・テイヴィッド・ロバーツ
新潮社《文庫》2011年 @882～1,040円
- 51 『「就社」社会の誕生——ホワイトカラーからブルーカラーへ』
菅山真次
名古屋大学出版会 2011年 7,770円
- 52 『出ニッポン記』 上野英信
社会思想社《文庫》1995年 1,427円
- 53 『情報の文明学』 梅棹忠夫
中央公論新社《文庫》1999年 720円
- 54 『食道楽』上・下 村井弦斎
岩波書店《文庫》2005年 @1,050円
- 55 『神聖喜劇』全5巻 大西巨人
光文社《文庫》2002年 @1,100円
- 56 『「新訳」経験経済——脱コモディティ化のマーケティング戦略』
B・J・バインⅡ、J・H・ギルモア
ダイヤモンド社 2005年 2,520円
- 57 『深夜特急1——香港・マカオ』 沢木耕太郎
新潮社《文庫》1994年 452円
- 58 『人類が知っていることすべての短い歴史』 ビル・ブライソン
日本放送出版協会 2006年 3,150円
- 59 『神話思考Ⅰ——自然と人間』 松村一男
言叢社 2010年 6,800円
- 60 『教室内（スクール）カースト』 鈴木翔
光文社《新書》2012年 882円
- 61 『スタンド・バイ・ミー——恐怖の四季秋冬編』
スティーヴン・キング
新潮社《文庫》2010年 788円
- 62 『西洋絵画の歴史1——ルネサンスの驚愕』 遠山公一
小学館《新書》2013年 1,260円
- 63 『生を肯定する——いのちの弁別にあらがうために』 小松美彦ほか
青土社 2013年 2,310円
- 64 『世界経済を破綻させる23の嘘』 ハジュン・チャン
徳間書店 2010年 1,785円
- 65 『世界を変えた6つの飲み物——ビール、ワイン、蒸留酒、コーヒー、
紅茶、コーラが語るもうひとつの歴史』 トム・スタンデージ
インターシフト 2007年 2,415円
- 66 『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』
スティーヴン・グリーンブラット
柏書房 2012年 2,310円
- 67 『宋詩概説』 吉川幸次郎
岩波書店《文庫》2006年 798円
- 68 『育ちあう風景』 清水玲子
ひとなる書房 2013年 1,785円
- 69 『そのとき、本が生まれた』
アレックスandro・マルツォ・マーニョ
柏書房 2013年 2,205円

- 23 『神の文化史事典』 松村一男、平藤喜久子ほか編
白水社 2013年 3,990円
- 24 『機械との競争』
エリック・ブラインジョルフソン、アンドリュウ・マカフィー
日経BP社 2013年 1,680円
- 25 『危険社会——新しい近代への道』 ウルリヒ・ベック
法政大学出版局 1998年 5,250円
- 26 『記号学の冒険』 ロラン・バルト
みすず書房 1988年 2,520円
- 27 『木のいのち木のこころ——「天・地・人」』
西岡常一、小川三夫ほか
新潮社《文庫》2005年 935円
- 28 『虚構市立不条理中学校』 清水義範
講談社《文庫》1998年 820円
- 29 『グローバル社会を歩く——かかわりの人間文化学』 赤嶺淳
新泉社 2013年 2,625円
- 30 『経済大国インドネシア——21世紀の成長条件』 佐藤百合
中央公論新社《新書》2011年 882円
- 31 『経済超入門——ゼロからわかる経済学&世界経済の今』
ニュースウィーク日本版編集部編
阪急コミュニケーションズ 2010年 1,000円
- 32 『芸術の都バリ大図鑑——建築・美術・デザイン・歴史』
ジャン＝マリー・ペルーズ・ド・モンクロ
西村書店 2012年 7,140円
- 33 『現代語訳 般若心経』 玄侑宗久
筑摩書房《新書》2006年 798円
- 34 『原発事故後の日本を生きるということ』
小出裕章、中嶋哲演ほか
農山漁村文化協会 2012年 840円
- 35 『憲法を守るのは誰か』 青井未帆
幻冬舎ルネッサンス《新書》2013年 880円
- 36 『行為する組織——組織と管理の理論についての社会科学的基盤』
J・D・トンブソン
同文館出版 2012年 3,360円
- 37 『行動分析学入門』 杉山尚子ほか
産業図書 1998年 3,780円
- 38 『獄中記』 佐藤優
岩波書店《文庫》2009年 1,050円
- 39 『心を動かすデザインの秘密
——認知心理学から見る新しいデザイン学』 荷方邦夫
実務教育出版 2013年 1,365円
- 40 『この世でいちばん大事な「カネ」の話』 西原理恵子
イースト・プレス 2012年 1,365円
- 41 『Kompas Ring of Fire』
PT Kompas Cyber Media 2011年 @300円 ※iTunesからのみ購入可。

ざ行

- 42 『在日外国人——法の壁、心の溝』 第三版 田中宏
岩波書店《新書》2013年 861円
- 43 『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？
——身近な疑問からはじめる会計学』 山田真哉
光文社《新書》2005年 735円
- 44 『殺人者の顔』 ヘニング・マンケル
東京創元社《文庫》2001年 1,050円
- 45 『時刻表2万キロ』 宮脇俊三
角川書店《文庫》1984年 580円

「本を読もう！」ブックリスト その ④

(2013.12.1 現在)

あ行

- 『明石海人歌集』 村井紀編
岩波書店《文庫》2012年 693円
- 『秋葉原事件——加藤智大の軌跡』 中島岳志
朝日新聞出版《文庫》2013年 735円
- 『あめつち』 川内倫子
青幻舎 2013年 6,090円
- 『アントキノイノチ』 さだまさし
幻冬舎《文庫》2011年 630円
- 『医学者たちの組織犯罪——関東軍第七三部隊』 常石敬一
朝日新聞社《文庫》1999年 693円
- 『石川啄木』 石川啄木
筑摩書房《文庫》2009年 924円
- 『1Q84』 Haruki Murakami
Vintage International 2013年 1,838円
- 『インプロヴィゼーション——即興演奏の彼方へ』 テレク・ベイリー
工作舎 1993年 2,415円
- 『雨月物語』 上田秋成
筑摩書房《文庫》1997年 1,470円
- 『薄墨色の文法——物質言語の修辞学』 今福龍太
岩波書店 2011年 2,940円
- 『馬の世界史』 本村凌二
講談社《新書》2001年 756円
- 『売れる商品は感性工学がある。——人の意思決定の9割は「気分」』
椎塚久雄
ベストセラーズ 2013年 1,365円

- 『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ
——18世紀フランスのジェンダーと科学』 川島慶子
東京大学出版会 2005年 2,940円
- 『OL委員会秘宝館スペシャル
——「日本一の田舎はどこだ」編』 清水ちなみ
幻冬舎《文庫》2000年 560円
- 『オーケストラの音楽史——大作曲家が追い求めた理想の音楽』
パウル・ベッカー
白水社 2013年 2,520円
- 『沖縄現代史』 新版 新崎盛暉
岩波書店《新書》2005年 861円
- 『「親の顔が見てみたい！」調査——家族を変えた昭和の生活史』
岩村暢子
中央公論新社《文庫》2010年 960円
- 『降りていく生き方——「べてるの家」が歩む、もうひとつの道』
横川和夫
太郎次郎社 2003年 2,100円

か行

- 『科学の方法』 中谷宇吉郎
岩波書店《新書》1993年 777円
- 『格差と貧困がわかる20講』 牧野富夫、村上英吾
明石書店 2008年 1,890円
- 『課長の会計力——自分とチームが結果を出すための数字の使い方』
望月実
日本実業出版社 2008年 1,575円
- 『貨幣と市場経済』 J・R・ヒックス
東洋経済新報社 1993年 3,570円

「本を読もう！」ブックリスト